



アイヌモシリへの旅
高野敦志

目次

夢に見た北海道	1
層雲峡は雲の中	10
オホーツク海の色	14
摩周ブルーは孤高の印	24
目には見えない海の壁	31
すでに始まった追憶	37
ふたたび北海道へ	48
地の果ては青春のるつぼ	53
どこまで行っても天塩川	63
海から突き出た利尻島	70

70 63 53 48 37 31 24 14 10 1

汗と涙の八時間コース
一難去ってまた一難
小樽市内のストーンサークル
記憶にかすむ函館山
いきなり女満別空港へ
地の果ての大自然
トドマツの白い骨
魔の湖を再訪する
釧路川をカヌーで下る
釧路湿原の展望台
空気が澄んでる旭川
静まり返った朱鞠内湖

かつての面影
緑の原野はいずこに
身の毛もよだつ迫力
阿寒湖畔に日は落ちて
サロマ湖は変われど
知床は記憶の果てに
時を止める湖面
釧路湿原は東から
工藤裕之の『追憶の鉄路』
あとがき

表紙

知床五湖

252246240230210198191184168160

156151143137134127107102100 94 89 79

夢に見た北海道

初めて北海道を訪れたのは、僕がまだ二十一歳の時だった。日本が世界第二の経済大国、日の昇る国と持てはやされていた頃である。時間があってもお金がない大学生で、周遊券を用いた旅だった。夏休みの半分が過ぎた八月末、上野駅に到着した僕は、十九時十分発の青森行急行「八甲田」に乗り込んだ。宇都宮^{うつのみや}辺りで、青函連絡船用の名簿カードを受け取った。早朝に津軽海峡を渡るのに、心構えさせるためだろう。向かい合いう席に座っていた老人は、咳^{せき}をしながら酒を飲んでいたので、いびきをかいて寝てしまった。眠りながら、おいで、おいでと手を動かすうちに、座席の下から何かが流れだした。黄色い水

たまりが迫ってくる！ 旅の初めから何てことだろう。あわてて席を変えた。

シートが直角であるせいで、すぐに背中が痛くなった。駅に着いた電気機関車から、発車する際にガタンとシヨックが来る。そのたびに起こされた。ポーと暗闇を汽笛が響いてくる。その繰り返した。一ノ関で岩手県に入ったので、あともう少しかと思ったら、県境に出るのに二時間以上かかった。一戸^{いちのへ}、二戸^{にのへ}、三戸^{さんのへ}と、いくつ戸があるのか、気が遠くなった。八戸^{はちのへ}を出ると、ようやく外が明るくなってきた。

青森まで十一時間もかかった。プラットフォームを下^おりると、陸奥湾^{むつ}に向かって歩いた。レールは港の先に続いている。前方

に見えるのは下北半島。どの船に乗るのか探した。八甲田丸は船体が錆びつき、衝突によるものか、一部が凹こんでいる。

銅鑼どらが鳴って出港。「蛍の光」が流される。陸奥湾を抜けて、津軽海峡に入った。日本海の方から、横並びの波頭なみがしらが近づいては崩れる。人々は船室の畳に腰を下ろすと、談笑したり飲み食いしたり。単調なエンジンの音ばかりが響く。青函連絡船が廃止された現在、かつて本土からは「蝦夷地えぞち」、道民からは「外地」と呼ばれた北海道との隔たりは、すでに失われてしまっている。目に見えない境界を越える感覚は、船で海峡を渡った人間にしか分からない。

四時間弱の船旅が終わった。港にはカモメが飛び交っている。函館駅はこだてに向かい、室蘭本線經由の網走行特急「おひとり」に

乗り込む。ディーゼルカーだから架線がない。風景がすっきりしている。電化しない方がいいんだ。大沼駅を通過すると、砂原支線に入った。

青く映はえる沼の脇を過ぎると、雄大な緑の大地が眼前に広がる。正面に晩夏の光を受けて輝く内浦湾、左方にそびえるのは駒ヶ岳。ゆつくりカーブして進む列車は、車体を傾かせながら、野性的だが穏やかな、パノラマの光景を満喫まんきつさせてくれた。北の大地が見せた贈り物は、大沼公園經由となった現在の下りでは見られない。

内浦湾は噴火湾とも呼ばれる。日本人（和人）が蝦夷地に移住を始めた江戸初期、寛永年間には駒ヶ岳が大噴火を起こし、

山の一部が崩れて内浦湾に流れ込み、大津波を引き起こした。有珠山も寛文年間からしばしば凶暴な噴火を繰り返し、麓の村を火砕流で焼き払った。

また、支笏カルデラの南に生じた、平坦な中央火口丘に、溶岩円頂丘が形成された樽前山は、世界的に珍しい三重式火山だが、ひとたび大噴火すれば、溶岩円頂丘ごと吹き飛んで、沿岸の苦小牧まで火の海に変えてしまう。噴火と切っても切れない湾は、そんな歴史とは無縁な顔で、数百羽のカモメの楽園となっている。

札幌に到着すると、お決まりのコース、ビルの谷間に埋もれた時計台を眺めた後、大通公園へ向かった。故郷の岩手を出た石川啄木が、一年足らず過ごした北海道だが、ここで残した歌

が石碑に刻まれていた。

しんとして 幅広き街の 秋の庭の 玉蜀黍の 焼くにほひ
よ

その夜は円山公園に近い、中央区宮ヶ丘のユースホステルに泊まった。人見知りする僕だったが、ここでは互いに知らない者同士、ゼロからのコミュニケーションだ。黙っていたら何も始まらない。声をかけ、旅の情報を交換する。そのうち、気が合う相手とも出会えるだろう。

翌日は札幌駅周辺を見物した。赤煉瓦作りの北海道庁旧官庁

は、前面に池を構えた厳めしい建物で、ここが屯田兵や囚人を指揮して、アイヌ人しか住んでいなかった内陸部を、組織的に開拓していったのである。

北大植物園は、北海道大学のキャンパスから離れた中央区北三条西にある。亜熱帯に生育するバナナやパイヤ、壺状の落とし穴で虫を捕らえるウツボカズラ、粘液で虫に巻きつくモウセンゴケなどの食虫植物、小笠原に分布する樹木化したシダなどを眺めた後、博物館でヒグマ、シカ、エゾオオカミ、キタキツネなどの剥製を見て回った。

北方民族資料室には、明治初期に収集されたアイヌ人の民族衣装や狩猟の道具、イヨマンテなどの祭礼の写真が展示されている。アイヌ人は熊を神としてとらえ、祭りで殺すことで肉をい

ただき、本来の神の国にお帰りいただくという信仰を持っていた。白老や登別を回る余裕がないときは、ここに来ればかつてのアイヌ人の暮らしぶりを、目の当たりにすることができる。

北海道大学のキャンパスは、北区北八条西にある。広大な敷地は芝生が広がり、公園か何かのようである。「少年よ、大志を抱け」で有名なクラーク博士の前に立つ。僕は前年、早稲田大学の友人から聞いた話を思い出した。三人で旅行していたというのだが、そのうちの一人がふざけて、博士像の鼻にタバコを突っ込んだというのだ。

彼はすべての権力は敵だと考えていたから、内村鑑三や新渡戸稲造を啓蒙した博士も、揶揄の対象にしてしまったのである。それに対して、「そんな不遜な態度は許せない」と一人が怒り

出し、親友だった三人は仲間割れしてしまつたという。僕の属したサークルにも、革マル派の遺品ともいふべきヘルメットが、まだ保管されていた時代である。尾崎豊の「この支配からの卒業 闘いからの卒業」という歌詞に共感できた世代のエピソードである。

層雲峡は雲の中

札幌駅で弁当「えぞ賞味」を買つた。蟹、イクラ、鮭、アワビなどが寿司飯に載っている。こんなうまい駅弁はないと思つた。特急ライラックで旭川へ。石北本線の急行大雪一号は、一両のディーゼルカー、窓は開け放たれて扇風機が回っている。しかも、自動車よりも遅い。三十分余りで上川駅に着き、バスで層雲峡に向かつた。

ユースホステルに宿泊すると、相部屋だった同志社大学の学生と気が合つた。二段ベットの上から顔を出し、「早稲田の学生か」と言いながら、にやりと笑つた。洗濯の話をする、「汚れた服は小包で自宅に送る」と澄まし顔。関西弁でしゃべるお

坊ちゃんタイプの青年だった。

翌朝、空は曇っていたが、二人で自転車を借り、小函方面に向かってサイクリングした。道を下っているはずなのに、やけにペダルが重い。左側には縦に筋の入った絶壁が、屏風のように延々と連なる。壁面からしぶきを上げる錦糸の滝まで行って、Uターンすることにした。

振り返って気がついた。ずいぶん坂を上ってきたんだな。これはよくある錯覚である。直線のだから坂だと、前方が下っているように見えてしまうのである。記念撮影して、あとはひたすら下っていく。

ユースホステルに戻ると、彼は「達者でな」という言葉を残して去った。僕は停留所まで見送った。ひとたび親友のように語らっても、「一期一会」と割り切ってさらりと別れる。旅をして高揚しているからこそ、意気投合したのであって、後日再会してもしらけるだけである。いい思い出とするためには、連絡先も訊かない方がいい。これがユースホステルでの出会いと別れである。

層雲峡の温泉街から、ロープウェイが延びている。リフトを乗り継いで、黒岳に登ることにした。標高一九八四メートル、その年の数字と同じ高さなので、登山を推奨していたのである。北海道の山は二千メートルでも、本州の三千メートル級に登る心構えが必要である。それなりの装備が求められるという。

山道は急だった。岩石が転がっていて歩きにくい。幸い、熊

は出てこなかったが。九合目を過ぎる頃には、小雨が降ってきた。山頂は雨。近くの人に写真を撮ってもらったが、雲の中にあるようで何も見えない。

すぐに下山した。悪路になっていた。滑る、滑る。二回も転んでしまった。ロープウェイの山上駅にたどり着き、山菜と山芋が入った黒岳そばを食べる。体が温まってとてもうまい。絵葉書を買った。ユースホステルに戻り、腰を下ろす。また一人になってしまったのを実感した。

オホーツク海の色

網走行きの特急「おおとり」に乗っていた。奇しくも、僕が函館発で乗ったのと同じ時刻の特急である。最初の状態にリセットされた感じである。駅弁を食べている。層雲峡と一緒にサイクリングした青年のことを思い出した。

絵葉書を取り出すと、家族と友人に手紙を書いた。学生時代、長旅をよくしたから、その間に葉書を出すのを習慣にしていた。旅の香りを届けるには、帰ってからのおみやげよりよほど新鮮だから。

いつしか居眠りしていた。今日の出来事は現実感が失われていた。終点に到着したのは午後十時。駅前のビジネスホテルに

泊まる。何でユースホステルを予約しなかったんだろう。部屋に浴室も洗面台も、トイレもない。

翌朝、サロマ湖に向かう。アイヌ語の「サル・オマ・ペツ」（葦が生える川）に由来する。網走駅には0番線ホームがあった。廃止間近だった湧網線のディーゼルカーが、今入線してきた。

トコトコトコトコ、小走りするような軽快な音を立てて、ガラガラの車両は走っていく。右側に能取湖の湖面が見えてくる。サンゴ草でほんのり煉瓦色に彩られている。ゆるやかなカーブを進みながら、あざやかな光景をさりげなく見せる。家もまばらな平原を、孤独なランナーのように走っていく。数年後に

は消されてしまうというのに、走ることだけ考えて。

常呂駅で下りた。ホームは路面電車の駅のように低い。郵便局で絵葉書を出した。バスで栄浦に出る。パンとジュースを買って、サロマ湖の湖口まで歩こうと考えていた。ところが、湖に向かう人の姿はない。

アスファルトの上を逃げ水が見える。迷彩服を着たエリート風の青年とガールフレンドが、自転車で並んで過ぎていく。

「頑張ってください！」

悪気はないんだろうが、何だか自分が見劣りしている気がした。いまだにサロマ湖の水面すら見えてこない。アイヌ人が残した常呂遺跡を右に進んでいく。

サロマ湖の牡蠣かき養殖の浮きが見える。鳥の形をしていると思つたら、一羽が飛び立った。すべてがカモメだった。鑑沸とうふつというアイヌ語地名は、湖の口を意味するという。東端に位置する排水路は、昭和の初めには閉塞したとのこと。したがって、丘に隔てられてオホーツク海はまだ見えない。

上空をトビが飛んでいる。凧たこのように両の翼に海からの風を受け、上昇気流に乗ってホバリングしている。虫の音、花咲いたまま枯れ、硬直した茎。もう夏は終わったのだ。丘を登っていこう！

あつ、口から声が漏れた。水の色が違う。北の海は緑がかつて、見るからに冷たい感じだ。うねりは弱いものの、吹きつける風はかなり強い。波打ち際で一気に崩れる。遠浅ではないんの内側には人の姿がない。はるかに続くアスファルトの道。

雲が広がりつつあった。波は凧ないできたが、潮騒しおさいは耳について離れない。水平線近くまで、雲が垂れ込めている。雲と海の狭間はざまに青い幻まぼろしが現れる。対岸など見えるはずがないのに。浜に目を落とすと、タンポポが咲いている。カモメが目の前を横切り、黄色い嘴くちばしが宙を切る。

湖の方を眺めると、向かいに漁村が見える。中央に錆びたクレーンが立っている。路面を千鳥足の小鳥が楽しげに跳ね回る。背後から何かが近づいてくる。エンジンの音が、そして急ブレ

ーキ。あつ、トラックか。

「おい、乗れや」

ヒッチハイクなんかしたことがない。北海道の人は心も広くて、ワイルドなんだなあ。向こうが疑わないんだから、こっちも疑っちゃいけない。乗り込むと、発車！ 運転手は言葉が少ない。でも、誰もいない道をとぼとぼ歩く若い奴がいたら、放っておけなかったんだな。

水門のところまで下ろしてもらった。しばらくして、栄浦で会った迷彩服の青年が、続いてガールフレンドが自転車で追いついた。

「また、会いましたね」

青年は名古屋から来て、サロマ湖のユースホテルに泊まっ

ているとのこと。作りが豪華な点が気に入ったらしい。

「窓からの眺めもステキ！」

ガールフレンドも微笑ほほえんでいる。水門の方から、営林署のおじさんが寄ってきたので、青年がいくつか質問した。

「冬になるとね、ここは流氷が三メートルも五メートルも押し寄せるんだよ。この先のワツカの森は、植林したもののなんだけど、キタキツネ、リス、シカも住んでいるんだ。十年ぐらい前にこの水門が出来て、サロマ湖の水質が改善してね。それまでは湖の奥は水が腐ってしまったんだよ。今獲れるのはチカ、ワカサギみたいな魚かな。ホタテの養殖はサロマ湖で二年、その稚貝を外海にばらまいて二、三年はかかるんだ。ウニ、ツブ貝、エビ、ホタテなんかは密漁されないように、監視しているんだ

けどね」

コンクリートの水門の内側は、凹凸のある鉄板に覆われていて、オホーツク海から潮が流れ込むたびに、ハタハタハタハタと音を立てる。水門の橋を渡り、ワツカ自然休養林に向かった。営林署のおじさんの姿はもうない。あの二人連れは橋のたもとで、肩を並べて湖を見つめている。

薄暗い森の奥を覗き込む。砂州の向こうにある海も見えない。聞こえるのは、草を踏む自分の足音ばかり。キツネやシカはどこにいるんだろう？ 背後で何かの気配がした。先ほどの青年とガールフレンドは、三脚を立てて記念撮影している。片づけて荷物をまとめ、並んで自転車にまたがると、一本道の先に吸

い込まれていった。

水門を通り過ぎて、帰路を目指すことにした。日は西に傾きかけている。青い球体が見える。地球かと思った。それなら、ここはどここの星なんだ。そんなはずはない。見上げると、月の姿は大空になかった。

丘の上を歩いている。沖に白と朱の浮きが漂っている。足元の枯れ草に杭が打ち込んである。先端にはピンクのテープが巻きつけられている。墓標ではない。杭には「さけ定置……」の文字が見える。海からの目印なのだろう。とぼとぼと歩くうちに、トラック三台に声をかけられた。時間が余っているからと、今度は断った。

ワツカ入口まで歩いて、網走バス十七時五分に乗ったが、お

客は僕ただ一人。常呂駅に戻り、線路を渡る。コンクリートに埋め込まれた二本のレール。小屋の端から覗くオホーツク海。再びここを訪れることがあっても、その時はここに駅はないだろう。

摩周ブルーは孤高の印

翌朝、網走駅を出ると、釧網本線せんもうはオホーツク海に沿って行く。斜里しゃり駅は知床半島しれとこの世界遺産登録に向けて駅名が知床斜里となったが、何かしっくりこない。そういえば、弟子屈てしかが駅も摩周駅となったが、駅名にも歴史があつて、人々の思い出に刻まれているのだから、観光振興のためとはいえ、むやみに改名すべきでない。

川湯温泉駅も、当時は川湯駅と呼ばれていた。川湯温泉のバスターミナルから、屈斜路湖くつしゃろまで歩くことにした。道は広いのだが人影はない。逃げ水が見える。「熊に注意」という看板。時折、フルスピードで車が過ぎていく。北海道の大地をこうし

て踏みしめてこそ、本当の旅と言えるんだとうそぶいてみる。もちろん、誰も聞いていない。三十分で屈斜路湖に到着。林の端から湖面を撮影する。

バスに乗った。摩周湖に向かう途中、硫黄山^{いおう}で途中下車した。アイヌ語でアトサヌプリ、裸の山というだけあって、溶岩が剥^むき出しのまま固まった山肌には、草木の一本も見当たらない。移動販売の車が出ているので、ソフトクリームを買ってみた。乳脂肪がたっぷり濃厚な味がする。食べながら、硫化水素が噴出し、黄色く染まった岩肌を眺めていた。ここは日本一の広さを誇る屈斜路カルデラの内部で、硫黄山も破局的な噴火の後に生まれた屈斜路カルデラの出張所。要するに、火口の中を移動してきたわけである。

摩周湖という地名は、アイヌ語の「マシ・ウン・トー」（カモメの湖）に由来すると言われるが、もちろん、カモメなど生息していない。かつては世界一の透明度を誇ったが、現在はバイカル湖に首座を譲り渡している。

カルデラ湖である摩周湖は、七千年前の破局的な噴火で、成層火山の山頂が吹き飛ばされた窪みに水がたまったもので、縄文時代に生まれた歴史の浅い湖である。しかし、その美しさには見る者の魂を奪う力がある。

バスで中腹まで登ったところで、突如摩周ブルーは現れる。中腹より上が陥没したに過ぎないので、いくつかの山が吹き飛んだ屈斜路カルデラと比べれば、規模は小さなものである。

とはいっても、富士山の貞観噴火の十九倍というすさまじい噴火だったとされる。過去の激しさと現在の静寂は、相容れないように思えるが、山体がふいに途切れて、巨大な湖が出現する異様さは、破壊的な威力の痕跡を物語っている。

摩周第三展望台に到着した。もし時間の余裕があるなら、人気の少ないここで摩周ブルーを堪能して、次のバスでみやげ物店のある第一展望台に移動した方がいい。写真で紹介される美しい眺めは、第三展望台からのものである。

正面の山はカムイヌプリ（摩周岳）、絶壁の下には深い青が映える湖面。中央にカムイツシュ（神のような老婆）と名づけられた小島が覗く。湖面の異様な身震いは、湖底で続く火山活動によるものか。湖面に降り注ぐ光は、ある深さまでは通り、

その下は深い闇が支配する。岸の縁だけは木々の姿が映り、ほのかに緑がかっている。突き出す山は砕けた岩が剥き出しで、青い水面の鏡に似姿を映している。音のない世界、耳をそばだてても虫の声ばかり。一言で言えば、息を呑む美しさ。

第一展望台に移動した。カムイヌプリの山下から、三つ又に分かれる線が水面に延びている。一本はカムイツシュにつながり、あとの二本は、手前の湖岸、カルデラのはるか彼方に延びている。カムイツシュを守っているのだろうか。ここからはカムイヌプリが、青い水面に映る姿は見られない。

摩周湖には流れ込む河川はなく、常に水位は変わらない。湖底から地下水が湧いてくるのだろうか。波紋が幾重もの弧を描い

て、青い水面を伝っていく。紅葉の始まりかけた木々に囲まれた湖は、碧空（きせきう）が映し出された鏡のようである。

平野には灰色の雲が垂れ込めているが、カルデラの真上には、深い青とは対照的な明るい空が広がっている。湖の中ほどのカムイツシュは、アイヌの神話によれば、酋長（しゅうちやう）に孫を殺された老婆が、永遠の安らぎを求めて島となったものだという。島に渡る人があると霧や雨になるのは、孫が来たと思つて流す老婆の涙のためだとされる。

霧の摩周湖と呼ばれるくらい、カルデラは霧に閉ざされていることが多い。湖面一杯に広がるガスから、カムイツシュが顔を出しているさまは幻想的だが、むしろその方が摩周湖のありふれた顔である。深い青をくまなく見渡せるのは、週に一度く

らいだという。そのため、摩周ブルーを目にした者は婚期が遅れる、という伝説が生まれた。自分は一人で生きていくのかもしれない……。

バスで弟子屈駅に向かった。今は摩周駅と呼ばれているが、釧網本線に乗った。釧路湿原は車窓から眺めるにとどめ、釧路市内春採湖畔（はるとり）のユースホステルに泊まる。同室には僕のことを、黒岳で見かけたという人もいた。一人旅での語らいは、うちにこもりがちな思いを癒してくれた。

目には見えない海の壁

日本で最も東に位置する駅、それは根室本線の東根室駅である。列車は狭い半島に入ってきた。駅を出ると大きくカーブして、次が終点の根室駅。釧路を出て各駅停車で、約三時間かかった。現在、この区間は花咲線と呼ばれている。

根室駅は殺風景である。これが幹線の終点とは思えないほど。稚内や網走のにぎわいとは対照的ではないか。バスに乗って納沙布岬なつぷみさきに向かう。到着したのは、午後一時四十五分。食堂で遅い昼食。かに飯を食べる。

岬に立った。肉眼でも水晶島や、手前の貝殻島の灯台は見える。北方館望郷の家の二階に上がった。望遠鏡が設置してある。

やや霧がかかっているが、国後島くなしりとうの泊山や爺々岳ぢやぢやだけが、雲間から覗いている。正面の平坦な島が水晶島で、監視塔の窓まで見える。海岸線の崖、打ち上げるしぶき。貝殻島にはカモメが群れているが、一羽一羽の姿までとらえられる。手前の海峡では、ソ連の警備艇が監視を続けている。

座礁した日本の貨物船が、船尾を天に向けたまま、錆びた船体を傾けている。波は荒い。深い海がカモメの飛び交う数メートル手前で、急に浅くなるのだろうか。

鎌を振り上げた波頭が、地崩れのように太平洋から流れ込み、目には見えない壁に沿って、狭い海峡に川のように注いでいる。終戦時にロシア人から追われて、このラインを越えてきた日本人は、もう故郷の島々に戻ることは許されなかった。

日本の漁船が目に見えない壁に沿って、ぎりぎりの波間を縫っていく。○○丸という漢字まで見える。ゆるやかなうねりに乗って、船は進む。目と鼻の先に透明な壁を立てられ、封じ込まれてしまったようなものだ。その向こうは日本の行政権が及ばないと思うのは奇妙だが、これは動かせない現実なのだ。

カモメは嘴を風に向け、翼を広げて風を切る。おどけた声を出して、岬近くの電柱に留まる。下の海では小舟が、潮の流れに翻弄されている。昆布は波打ち際に打ち上げられ、よじれた茎がうねりにもまれている。

砂利じやりの上に干されているのも昆布。辺りは海藻の匂いが立ちこめている。とりわけ、乾燥室の小屋の排気口から。生干しに

なったところで、人為的に乾燥させているらしい。これらの多くは、ソ連政府の許可を受けて、貝殻島周辺から刈られてきたものだった。

僕は望郷の家を見た、江戸時代から行われた千島開拓の展示を思い出した。島を奪われた人々のことを考えれば、返還は一日も早く実現されなければならない。根室市内で目にした「島を返せ」という看板。返還を願う歌声が耳についてしまった。

望郷の家の壁には、ソ連軍侵攻の経緯が図示されていた。連合国側はヤルタ密談により、ソ連の日本への参戦を決めていた。それが一九四五年八月八日、ソ連軍の対日宣戦と日ソ中立条約の一方的破棄につながる。ソ連はその見返りに、南樺太と千島列島ばかりでなく、留萌るもいから釧路以北の北海道の割譲も画策し

ていた。

日本がポツダム宣言を受諾すると、ソ連軍は南樺太と北千島の得撫島うるつぶとうまで占領する。ところが、まだ南千島にアメリカ軍が到着していないと見るや、南千島の国後島・択捉島えとろふとうばかりでなく、本来は北海道に属する歯舞諸島はほまいと色丹島しこたんとうまで占領してしまった。北海道の北半分割譲はアメリカ軍に拒否されたが、敗戦時に北海道まで失う危険があったのである。この展示を見ていた男性が、憤然として言い放った。

「大砲、ぶっ放してやりたいな！」

しかし、ここで血気にはやっても事態は改善しない。ひとたび戦争を起こし、敗戦すれば人命ばかりでなく、領土を強奪する口実を与えてしまう。愛国心を高揚するだけでは、問題は解

決しないのである。

ソ連政府がロシア政府となっても、北方領土にあった日本人の街はすでに壊され、ほとんど痕跡は残っていない。粘り強く交渉は続けていくべきだが、日本人が自由に北方領土に行き来できる環境を、画策する方が有効なのではないか。ヨーロッパのように、身分証明書さえあれば、ビザなしでも国境を往来できるように。

すでに始まった追憶

僕のポケットの中には、セリーヌの『夜の果ての旅』が入っていた。その前書きに「旅は想像力を働かせる」という言葉がある。たしかに、旅をしている間は、僕の感覚は数倍きめ細くなり、目にするもの、耳にするものへのあふれる思いに満たされる。

旅の終盤が近づいてきた今、日記をつづりながら出会ったことを、記憶の中にとどめようとしていた。魂の中でイメージが定着したとき、はじめて自分が旅することによって生きていたのを感じる。その意味ですでに、旅を追憶していたのである。

根室からの列車で、僕は半分は眠っていた。九月初旬の午後

六時半だが、本土の東端は、すでに闇が支配していた。北海道らしい、野性的な風景ともうお別れだろう。自分はまた本州に近づいていく。

釧路発の夜行列車が出発した。石勝線経由の札幌行である。足下はヒーターで暖かい。僕はこの旅の出来事を、夢うつつの中で反芻していた。

いったん札幌に出た後、室蘭本線の白老しらおいで下りた。ここにはアイヌのコタン(村)がある。地名は「シラウオイ」(アブの多い所)に由来する。このコタンは、ポロト湖という湖のほとりに出来たことから「ポロトコタン(大きな湖の村)」と呼ばれてきた。

ここはアメリカ先住民の集落と同じく、すっかり観光地化されておられ、アイヌ古来の家（チセ）が並び、アツシという紺地に白い線の入った伝統的な衣装を身にまとったアイヌが、口笛とムツクリ（口琴）に合わせて踊りを見せてくれる。

といっても、日本人がもはや丁髷ちよんまげを結っていないように、現在のアイヌはすっかり和人（シヤモ）に同化してしまった。アイヌが小学校に上がって、学校でアイヌ語を話すと、それだけでいじめの対象とされた。そこで、アイヌは子供が不憫ふびんだからと言うので、家でもアイヌ語を使用するのをやめてしまった。

沖繩において、琉球語を使っただけで、首に「方言札」をかけられたため、若者が話せなくなってしまうのと、同じ現象が起きていたのである。しかも、アイヌの場合は大多数の和人に

囲まれた、少数民族であったために、差別はより過酷な形で現れた。

室蘭本線の登別駅で下りた。地名はアイヌ語の「ヌプルペツ（色の濃い川）」に由来する。バスで登別温泉に行くと、温泉街の入口で硫化水素の臭いがした。地獄谷は植物がない荒涼とした谷間を、整備された歩道が延びている。噴煙に関しては、川湯温泉近くの硫黄山（アトサヌプリ）の方が凄まじかった。

ロープウェイでクマ牧場に向かう。餌をやると、二本足で立って、前足を叩たたいて催促する。中にはのけぞって後ろ足を叩き、お尻まるだしのクマもいる。

「ちよっとだけよ、あんたも好きねって言うてるよ」

近くのおじさんが、ザ・ドリフターズの下ネタをつぶやくと、周囲にいた人たちがどっと笑った。当時の加藤茶の話にしても、今の若者には通じないかな？

クマの芸当も見た。玉転がし、自転車こぎ、火の輪くぐり、棒渡り、玉投げ、数当て、色当てなど、どこまで分かっているのか。でも、動物って意外に賢い。自分が賢いと思って、実は愚かなのは人間の方かもしれない。

展望台からは倶多楽湖が見える。アイヌ語の「クツタル・ウシ・トー」（イタドリが生える湖）が語源である。カルデラ湖である。ユーカラの里では、チセ（家）の中でアイヌの老夫婦が座っていた。西洋人のように彫りが深いというけれど、ちょっと見ると東北辺りの老人とあまり変わらない。おじさんの方

は無口で、おばさんが話をしてくれた。

「本州の人は、アイヌはクマと家の中で暮らしていると思ってようだけど、なんぼアイヌだつて、クマとは暮らしませんよ。私は火事で戸籍が焼けてしまって、昭和三年生まれなのに、いい加減な戸籍作られて、昭和四年生まれになってるんです」

苫小牧市営バスで、ウトナイ湖畔にあるユースホステルに泊まった。ウトナイ湖は野鳥のサンクチュアリとして知られているが、白鳥が訪れる十一月はまだ先のこと。慶応大学の学生と意気が合った。ペアレントのおじさんに、「どうせ坊ちゃんだから、ベットの片づけもできないんだろう」と言われ、失礼だと憤激していた。翌日、出立する前に、函館で再会して一緒に

帰ろうと約束した。

洞爺駅からバスに乗り換えた。湖畔でニジマスとシシャモの寿司を食べていた。洞爺湖もカルデラ湖で、十一万年前の破局噴火で大火砕流を吐き出した後、陥没して巨大な湖となった。湖面中央の中島は、溶岩ドームの名残であり、エゾシカが生息することで知られている。

足こぎボートがあつたので、ちょっと乗ってみることにした。本当は二人乗りなので、一人だと傾いてしまい、まっすぐ前に進まない。湖水は深みのある青で、波立ってはいないものの、横風を受けるとゆらゆら揺れる。中島に近づくなど思いも寄らない。ジグザグに進むしかなかった。

遊覧船が近づいてきた。幾重ものさざ波が押し寄せてきた。

ボートは激しく揺れる。ハンドルを切って、巨大な船体からようやく逃げた。借りたボート屋が見えてきても、なかなか横付けできない。

大沼公園に向かっていった。座席は空いておらず、車両の連結部近くから、窓の外を眺めていたのだが、駒ヶ岳が行きと同じように、左側に見えるわけが分からなかった。どうやら砂原支線は通らなかつたのだ。あのダイナミックな大パノラマは、目にする事ができないのか！ 上りは本線しか通らないのだつた。

その日は大沼のユースホテルに泊まった。翌朝、沼の周囲を一人でサイクリングした。多くの島、突き出た半島があり、

遊覧船も就航していると、ペアレントのおじさんが教えてくれた。島のいくつかには橋で渡った。自転車を引いて坂道を上っていくと、三〇三メートルの頂^{いただき}まで十五分足らずで到着した。内陸の松島といった感じで、北海道の旅もいよいよ終盤戦に入ってきたのを感じた。

夕方、函館山の山頂まで、ロープウェイで登ってきた。日没までには少し時間があつた。ここは火山島が砂州で亀田半島とつながつたので、函館の街が平坦なのは、かつては海峡だったからである。高層の建築を除けば、へらでつぶしてしまつたようにぺちゃんこだ。

函館港内には、わずかのさざ波も立っていない。輝きの衰えた光を浴びる海面に、出港した船が二筋の物憂い筋を描いてい

く。風はやや強いものの、津軽海峡の波は穏やかで、日没を迎えると点在するイカ釣り船から、漁火の明かりがともり出す。

午後六時過ぎ、ようやく函館の夜景が始まる頃、僕は青函連絡船に乗るために、函館山を下りることにした。しかも、お金をけちって車道を下りた。街灯もない蛇行する山道を、観光バスが次々に上ってくる。次第に闇が辺りを支配し、対向車のヘッドライトに目くらましを食らう。何て無鉄砲だったんだろう。

函館駅でおみやげを買い、連絡船の待合室に向かう。ウトナイ湖で知り合った慶応大学の学生が見つからない。やむを得ず、十和田丸に乗り込み、食事を済ましたところで、彼と出会った。向こうでも僕のことを探していたそうだ。

いよいよ、北海道ともお別れだ。二人で甲板に出た。橋^{はしゆきお}幸夫

の「絆きずな」の歌声が響く中を出港。函館山の横の暗い海を、連絡船はゆっくり進んでいく。それから、東北本線の急行「八甲田」の中でも、二人は旅の間の出来事や、これからの人生について語り合った。

上野駅には午前十一時に到着。新宿駅の中華レストランで乾杯した。別れ際に彼は「いつ会えるか分からないけれども、その時は……」と言った。それから三十年経たったが、ついに会うことはなかった。

ふたたび北海道へ

僕が初めて北海道を訪ねてから、七年の歳月が過ぎていた。すでに二十八歳になり、モラトリアムで人より長かった学生時代も、二年前に終わっていた。曲がりなりにも就職して、外国人に日本語を教え、人の相談にも乗れるようになっていた。

旅立ったのは、八月中旬、残暑がまだ厳しい時期だった。今回も上野駅から急行「八甲田」に乗ったのだが、車内は小ぎれいで快適になっていた。僕は雑誌『宝島』の別冊『夢の本』を携えていた。銀河鉄道に乗車している気分だった。これからの旅が自分の人生にとって、一つの転機になるのではと、密ひそかに心当てにしている。

初めて北海道を旅した思い出は、僕にとつては美しい夢だった。大学生の頃の期待と不安が入り交じった感覚は、今となつては懐かしい。もう戻れないことは分かっているから。当時の旅の場面が、断片的ではあるが、鮮明によみがえってきた。余りにもありありと見えるので、今すぐにでも戻れそうな気がするのだが……。

青森駅に着いた。前回との大きな違いは、青函連絡船がすでに廃止されていたという点である。海を渡るという感覚が失せたことで、過去との断絶を改めて感じさせられた。そのまま津軽海峡線に乗り換える。車窓から眺められるのは水田ばかり。海が少し見えた後、いよいよ世界最長の海底トンネルに入る。北海道側の地上に出るまで四十五分かかるらしい。

ゆっくりした下りを、列車は猛スピードで滑っていく。津軽海峡の真下を通過している。海面下百五十六メートル。トンネル進行方向左側には、発光ダイオードによるアニメーションが現れた。ジャンプするウサギやはばたく鳥などが。

トンネルを出てしばらくすると、車窓から函館山が見えてきた。列車に揺られながら再会するのも、時の流れを表しているのか。やがて、新幹線が走ることになるわけだが、それはこの時点から四半世紀後のことである。

函館本線は電化されていない。ただ、今回は砂原支線ではなく、大沼公園經由の本線を通った。あの野性味あふれるパノラマは、記憶の中でたどるしかなかったのである。とはいえ、架

線とか視界を遮さへるものがないのはいい。ディーゼルカーは特急でも、とりわけ速いわけではないが、スピードを上げるとエンジンンジンのうなりが伝わってくる。一生懸命走っているのが分かる。

札幌駅に着いたとき、青いタイルの壁に見覚えがあつた。前回、この駅舎に向かつて「また戻ってくるからな」と語りかけたものだが、それから早七年も経ってしまったのか。感傷に浸ひたる間もなく、電光掲示板にソ連ゴルバチョフ大統領失脚のニュースが現れた。ソビエト全土に向こう六ヶ月非常事態宣言が発令された。すでに戦車がモスクワ市内を走り回っているらしい。旅行気分が吹っ飛んでしまいそうになつたが、情勢の成り行きは随時入手することにして、札幌市立ライオンズユースホス

テルに向かった。ここは札幌オリンピックピックの際、選手の訓練所として建てられたものだそうで、外見も立派だったし、料理もおいしくサービスも行き届いている。

地の果ては青春のるつぼ

札幌発網走行のオホーツク三号に乗っていた。ゴルバチョフ失脚後、モスクワ市内では、戦車と市民とのにらみ合いが続いている。ラトビア共和国では、すでに軍の発砲による死者が出ている。ソビエト連邦がまさに、崩壊に向かいつつあった。石北本線に入ると、空は雲が広がってきた。車窓を眺めながら感じたのは、人間が保つべき慎ましきだった。人間は大地の一部を切り開いて町にしたが、町と町の間は延々と続く林と草原である。

網走からは釧網本線に乗り換えた。線路の手前はジャガイモ畑や、牧草地が広がっている。冬の間の飼料にするため、牧草

をロール状に巻いたのが、黄色い草原に点在している。その奥には手つかずの林が、ナイフで切られたように一直線に連なっている。

斜里駅はまだ、知床斜里と改名されていなかった。前回の旅行では足を伸ばさなかった知床半島に、これから向かうところだった。ウトロまではバスに乗った。途中、オシンコシンの滝の横を通った。アイヌ語の「オ・シュンク・ウシ」（川下にエゾマツが群生するところ）がなまったもので、急峻な崖が迫ったバス通りから、偉容の一端がうかがえる。

「知床夕陽のあたる家」ユースホステルに泊まった。夜はバーベキューだった。山盛りの魚とイカ、カニ、もう一皿には牛

肉と野菜をいっぱい載せ、いくらと味噌汁にご飯。デザートはチーズケーキにメロンと、食材の豊富さとおいしさに我を忘れた。

観光について説明を受けた後、僕は同じ部屋に泊まった青年二人と、ユースホステルが主催する、知床峠での星見ツアーに参加した。バスで峠の駐車場まで行き、毛布を敷いて仰向けに寝るのである。

まだ月が出ていたので、夜空はかなり明るかった。天体望遠鏡を使って、まず月のクレーターを見せてもらった。月が山影に沈むと、空は暗さを増して、光の弱い星々も藍色のバックから浮かび上がってくる。天の川の形もぼんやりうかがえた。星空の説明を聞くうちに、いい気分になっていき、土星の輪を見

せてもらったあたりで、宇宙と一体化してしまった。

翌朝、僕はまだどこを回るか迷っていた。同室の青年たちの一人は、雲行きを心配してバスで知床五湖へ行くと言っていた。もう一人はレンタルバイクを借りて出かけた。

僕はマウンテンバイクを借りることにした。下の停留所には、知床五湖へ向かう彼がいた。向こうで待っているよと言ってくれた。先に出発したのだが、すぐにバスに追い抜かれてしまった。とにかく、上り坂が多くてつらかった。きつい坂よりも、いつ果てることもなく続くのだらだらの方に気が滅入った。また、猛スピードで下っていくときも、帰路のことを考えると憂鬱ゆううつになった。

頭の中では、ウエス・モンゴメリーのギター演奏による「酒とバラの日々」が響いていた。ずいぶんおしゃやかな題名なのが、アル中で引き裂かれる夫婦をテーマにした映画音楽で、中毒から抜け出せない妻に対する切々たる思いが、飾らない真挚なメロデーから感じられた。今の自分の気分にぴったりだった。

途中、舗装されていない道もあった。彼が待っていてくれるから申し訳ないとも、待ちきれずに行ってしまうのではないかとも思った。知床五湖に到着すると、みやげ物屋の前で彼は待っていてくれた。もう五湖は見てしまったとのこと。でも、再会の約束が果たせたのはうれしかった。

僕は一人で知床五湖を巡ることにした。鬱蒼とした森の中に、

鏡のような湖が点在し、天気が良ければ知床連山を水面に映しているはずだった。周囲にはヒグマやエゾシカが生息し、運が良ければ(?)、姿を間近に見られるということだった。

しかし、空はどんよりして、おまけに小雨までぱらついてきた。途中の道で、バイクで出かけた彼の方と出会った。みんな行くところは似たり寄ったりなのだ。もしかしたら、知床大橋まで足を伸ばすかもしれない、と洩らしていた。

僕は意を決して、マウンテンバイクに鍵をかけると、大橋行きのバスに乗り込んだ。その先はさらに悪路だった。曲がりくねった道は、開鑿したばかりの林道といった観があった。バスでも通行するのがきつい道だった。脇からキタキツネが寄ってきて、乗用車の窓を見上げて餌をねだっているとところなど、犬

とそっくりだった。バスが近づいていくと、キツネはびくつとして山中に逃げていった。

終点の知床大橋で下りたのは、僕一人だった。深い谷に茶色い鋼鉄製の橋がかかっている。欄干から見下ろすと、谷底に吸い込まれそうな気がした。橋を渡りきった先は、一般車進入禁止になっている。知床の自然が守られているのも、奥地へ人間が入り込むのを制限しているからなのだ。

谷の底からハーブのような香りが漂ってくる。赤や紫、黄色、白の小さい花が、地味な装いで混じり合っ生えている。以前、聞いた話なのだが、さまざまな種を混ぜ合わせてまくと、それぞれの草が互いに支え合っ、病虫害から身を守るのだという。

自然は共生することで、一つの環境を作っているんだな。

そのとき、バイクの音がした。知床五湖で再会した青年だった。近くに家族連れが立っていて、写真のシャッターを切ってもらえないかと声をかけられた。言われるままに応じると、カムイワッカの滝まで家用車で送ってくれた。若さというのは特権である。何かあると、向こうから手を差し伸べてくれるのだから。

カムイワッカとは、アイヌ語で「魔神の水」という意味で、強い硫黄成分を含んでいる。川の水に手を突っ込むと、確かに生ぬるい温泉といった感じだ。急流を上っていくと、山の上は露天風呂みたいに、滝壺が温泉となっているらしい。ただ、今回は帰路の体力を温存しておくために、沢登りは次回に回すこ

とにした。振り返ると、バイクの彼が立っていた。お互い手を振って別れた。

知床五湖まではバスで戻り、一休みをした後、雨の中ずぶ濡れになりながら、ウトロへの帰路を急いだ。途中、二十歳前後の若者たちと出会った。彼らもサイクリングしていたので、励まし合って悪路をこぎ続けた。ユースホステルに戻ると、冷えた体を温めようと温泉に入った。

夕食の時、知床大橋で僕を見かけたというアメリカ人の若者らと、テールを同じくした。日本語がかなり流暢りゅうちようだった。それもそのはず、高校時代、日本のアメリカン・スクールに通っていたのだそう、今はアメリカの大学に通っているが、三ヶ月間、東京でホームステイしているということだった。

すでに十五、六の頃から、二十二、三に見られていたという話を聞いて、改めて僕は思った。なるほど、アメリカ人から見れば、日本の大学生なんか、高校生ぐらいにしか見えないんだろう。それだけ子供っぽいということだ。

その夜は消灯の時間まで、旅の話題で沸いていた。そこにいた日本人も、みんな気がいい奴ばかりだった。アメリカ人の若者は、ギターを弾いていた。外は叩きつける雨と風で、窓や戸口が騒がしい音を立てていたが、その場の高揚した気分は、外の嵐を物ともしなかった。

どこまで行っても天塩川

志賀直哉の短編に「網走にて」というのがある。東北本線に乗っていた語り手が、偶然乗り合わせた母子と口をきく。北海道の網走に行くという話を聞き、子供の様子から父親の容貌を想像などして下車するという話で、人物の観察と簡潔な語り口は生きているが、物語性のないエッセイのような作品である。翌日、網走で石北本線に乗り換え、旭川方面に向かっていた。これから触れようとしている出来事も、「網走にて」とは違った意味で、列車内での偶然の出会いと別れである。

今回、オホーツク海について触れなかったのは、大学生の時に目にした、緑色に輝く海ではなかったからだ。雨がちの天候

で、海面は終始グレーだった。旅とは自分と異なるものを受け容れる過程である。思い出をなぞってばかりいてはいけない。大切なのは、今ここにいる感覚を肌で感じることなのだから。旭川で急行「宗谷そうや」に乗り換えた。隣の席の背広姿の青年が話しかけてきた。彼は稚内の出身で、今東京の大学の四年生、就職は地元ですることしたので、就職試験を受けるために、三年ぶりに帰郷することにしたというのである。

僕は当時、北海道の友人がいなかったから、道内の生活については詳しく知らなかった。彼はこちらの問いかけに、友人のような気軽さで答えてくれた。また、彼の方も宗谷本線の長旅で、話し相手がほしかったのだろう。

「北海道の家には雨戸がないんですよ。みんな二重窓になって

いる。それから雨樋あまじいもない。屋根は内地（北海道の人は本土のことを内地と呼ぶ）みたいに瓦ではなくてトタンですよ。それが当然だと思っていたから、修学旅行で東京に行ったとき、また大学に入って半年間は、カルチャーショックでしたね」

彼の話によると、北海道は文字通り、一つの自治体であって、すべてが札幌中心になっている。そのために、町と町の交流もない。北海道だけで一つの共和国みたいに思っているから、本州とか他の地域のことはどうでもいいと考えているらしい。

宗谷本線は名寄なよろに到着した。すでに紋別もんべつ方面に向かう名寄本線は廃止されていたが、朱鞠内湖しゅまりないこ沿いを走り、深川に向かう深名線めいせんは残されていた。沿線の降雪量が多く、代替の道路も出ていないからということで、オレンジ色のディーゼルカーが、

エンジンを吹かしたまま停車していた。廃止される四年前の話である。

「宗谷線の利用価値があるのは、名寄までですよ。それから先は切り捨てたいんだろうけど、稚内があるからそれができない。だから、見捨てられているんですよ。こんなところに投資する金なんかない。レールが悪いからすぐ揺れるでしょ。枕木だってコンクリートに取り替えていないし」

名寄を過ぎると、列車は天塩川に沿って進んでいく。駅と駅の間は牧場と原野が広がっていて、人の姿はほとんど見かけない。代わり映えのない、けだるい風景が延々と続いていく。

「鉄道を敷くときに、この川を使ったんですよ。これだけ長く走っていて、トンネルは一つしかくぐらなかつたでしょう？」

この辺じゃ芋を作るか牧畜をするしかないんですよ。どこか暗い感じがしないですか？ 空が曇っているから、余計そう思うんだらうけど。窓の外を見ていても面白くないから、物思いに耽るしかない……」

青年は理知的な口の利き方をする。才能があるだろうに、それを発揮できるところが見つからず、軽い苛立ちを覚えているような。といっても、他人を蹴落としても、とまでは考えないらしい。ロマンチストのようなところがある。

「あの牧草地の上で、横になってみたいなあ。牛の糞があつたりしたら大変だけど」

「それで、東京の暮らしよりも、こっちの方が合ってるって思つたんですね」

幌延ほろのべを過ぎると、天塩川は大きく左に折れ、日本海に向かつて注いでいく。サロベツ原野が広がる脇を、列車はゆつたり進んでいく。

「この単調な風景から、いきなり町に入ります。南稚内に入る直前に、少し海が見えるはずですよ。ほら……」

青年の指さす先には、午後の日射しにかすんだ利尻島りしりとうの、天に突き出した頂が蜃気楼しんきろうのように見えた。これから自分が渡ろうとしている島である。

「もう少し行くと、あの右側に僕が出た稚内高校が見えてきますよ。ああ、あれです。照明灯が見えるでしょう？ 汚い学校だけど、懐かしいなあ。町の方も全然変わってないみたいだし。他の奴はもう、東京に戻っちゃったのかなあ……」

無邪気な笑顔が広がった。彼は大学に合格した夏に一度、稚内に帰郷しただけで、今回、ふたたび故郷を目にした時には、学生生活も終わりを告げようとしていた。東京での暮らしを楽しみながらも、故郷で生きることを選択したのである。

南稚内駅で青年は列車を下りた。四時間ほどの間であったが、話を聞くうちに感情移入してしまい、彼と同じ気持ちを体験していた。互いに名前を告げることなく別れたが、僕の記憶に声は刻み込まれた。

海から突き出た利尻島

稚内は国境の町である。原野を抜けた先に、突如、中小のビルが建ち並ぶ都市が現れ、高台には自衛隊のレーダーがそびえている。ここは南下するロシアに対し、国防上整備された町なのだ。真夏というのに二十度ぐらいで、余りの涼しさに身震いしてしまいそうだ。

今回の旅では、稚内は通過点に過ぎない。ユースホステルで一泊し、次の日の午前中には、すでに利尻島へ向かう船の中にいた。ソビエト国内のニュースが耳に入ってきた。ゴルバチョフ大統領が復権し、エリツインの奮闘によって、共産党による権力奪還は失敗した。これで保守派は一掃されるのだが、ソビ

エト連邦そのものが崩壊し、ゴルバチョフも失脚するのは、もう少し後のことである。

利尻島のおしどまりこう鴛泊港に到着すると、ユースホステルの緑色の旗がなびき、若者たちがギターに合わせて歌っていた。今日島を去る人々が乗り込むと、紙テープが甲板と岸壁に伸びて、歌いながら別れを惜しんでいる。ものすごい乗りなので、圧倒されながらも、学生時代の気分がよみがえってきた。

ユースホステルに荷物を置くと、今日着いたばかりの香川の青年と、サイクリングすることにした。鴛泊から島を一周しようと考えたのだ。最初に訪れたのは姫沼だった。森に囲まれた小さな沼で、空が晴れ渡れば、バックに利尻山を拝むことができる。標高一二五メートルまで、自転車で上るのはかなりきつ

い。途中の坂で青山学院大学の二年生と会った。サイクリング・サークルに属しているそうで、人なつっこい性格だった。三人で島を回ろうということになった。

ようやくたどり着くと、休憩所のおじさんとおばさんが、お茶を出してくれた。おじさんは話し好きで、トドのことを質問すると、いろいろ教えてくれた。

「トドだったら、冬、襟裳えりもに行けば見られるさ。自衛隊に頼んで、駆除してもらうくらいだから。自分で百メートルも潜るのは面倒なんで、上がってきた網を切つて、ごっそりかつさつていくんだよ。船によつては銃を構えて、トドさ出てるのを待つてるんだが、そういう船には近づかねえんだよ。トドは頭がいいからね」

姫沼は一周八百メートル、ゆつくりと回った。雨上がりなのか、木陰の下はとても涼しく、ほとりの水道は冷たくておいしい。お腹が空いてしまい、香川から来た青年の勧めで「利尻ラーメン」を食べた。帆立貝や海老が丸のまま、大きな蟹の足、チャーシュー、昆布、野菜などが入っており、スープのおいしさは格別である。

腹ごしらえが済んだので、時計と逆回りでサイクリングすることにした。道の起伏は比較的少なく、車もとても少ないので、かなりのスピードで走ることができる。利尻空港の脇を過ぎ、杳形岬公園くつがたまで来たとき、青山学院の学生の自転車がパンクしてしまった。「先に行つて下さい」と言われても、見捨てるわけにはいかない。

ところが、彼はサイクリング・サークルに属しながら、パンクの修理もしたことがなかったらしく、それがばれると頭をかいていた。香川の青年がパンクの修理をしてあげた。しかし、空気入れも壊れているのかタイヤが膨らまない。

すでに時計は三時を回っていた。これでは島一周できないのではないか？ 青山学院の彼は空気入れを探しに行き、香川の青年は杳形の森原牧場に向かうとのこと。ちなみに、利尻島唯一の牧場が廃業となったのは、この年一九九一（平成三年）だったから、その直前だったことになる。

せっかくのトリオはあっけなく解散。僕は諦めきれなかったので、一人で利尻島を一周することにした。この頃には空も晴れ渡り、利尻山の全貌ぜんぼうがうかがえた。

最初の目的地は、仙法志せんぼうしの先にある御崎公園自然水族館みさき、と
いっても、岩をくり抜いた生け簀すにゴマフアザラシが二頭い
りだけだった。溶岩が海に流れ出して固まった所なので、周囲に
は奇怪な形の岩が立ち並ぶ。百円で魚を数匹買い、アザラシに
食べさせることにした。体は大きく、中学生くらいの体重はあ
りそうだった。

頭の方だけ水面の上に出し、目は真つ黒で丸い。泳ぐ犬とい
った感じだが、水中を進むときは魚雷みたいに、足をすぼめて
仰向けになり、尾びれの力だけで突っ切っていく。全部魚をや
ってしまっても、まだ物欲しげな目をしているが、カメラを向
けると気になるのか、ちらちらこちらを見ている。

利尻島の海岸線は、なだらかな道が続いており、見通しもい
いので、サイクリングには最適である。これは利尻山が古い火
山で、長らく噴火を休止しているため、侵食が進んで山頂を除
けば急峻な地形が見られないためだ。

日が西に傾き始めていた。オタトマリ沼で少し休憩した。ア
イヌ語で「砂のある入江」を意味する。水は澄んでおり、沼の
周囲には葦が生えている。人気ひとけはほとんどない。静かで落ち着
く感じだった。

ここから見る利尻山が一番美しいかもしれない。岸辺を歩
くと、クッションのようにわずかにへこむ。草が腐りきらずに泥
炭のまま、堆積たいせきしているためだろう。

あとは死にもぐるいでペダルをこいだ。日が山影に隠れる

と、寒気すら感じるようになった。ユースホテルに到着したのは、六時十五分。他の人たちはすでに食事を終えていた。鴛泊にある夕日ヶ丘展望台に行くと話している。

食べ終わってから丘を登っていくと、中腹の辺りで他の人たちは下りてきた。夕日はすでに沈んでしまったが、赤く燃える空と、礼文島の島影は美しかった。丘の上にはハマナスがたくさん赤い実をつけていた。

鴛泊のユースホテルでは、宿泊者のミーティングが開かれていた。ヘルパーの少年がギターを弾きながら、会場をはね回っていた。早朝登山の話が出て、大いに引かれたのだが、往復には半日近くかかり、連泊が必要だということなので、今回は

見送ることにした。

翌朝、利尻山には雲一つかかっていない。あの頂からの眺めは、さぞ素晴らしかったことだろう。後ろ髪を引かれながら、鴛泊港まで、ユースホテルの車で送ってもらい、甲板では見送りの人たちと歌をうたった。ちなみに、「利尻グリーンヒルユースホテル」は、ユースホテル協会との契約を解除し、二〇一三年（平成二十五）以降は、素泊まりの宿「利尻ぐりーんひる inn」となっている。

汗と涙の八時間コース

鴛泊港を出港して四十分、お隣の島、礼文島の香深港かふかに到着した。礼文島の語源はアイヌ語の「レブン・シリ」（沖の島）である。港にはユースホステルから車が迎えに来てくれた。ここには北海道の「三大〇チガイユース」の一つとの噂があった。「桃岩荘」があるのだが、僕は恐れをなしてしまい、今は存在しない「礼文ユースホステル」に泊まることにした。

荷物を預けたあと、昼食を食べべに香深の町に出た。いか刺身定食とうにぎり（ウニのおにぎり）を食べる。時間が余ったので、島の西海岸に近い桃岩まで、山道を登っていくことにした。岩ととっても、小山ほどのとんがり頭に、草がまとわりついて

いるといった感じだ。ニシン小屋を改造したという、例のユースホステルが存在する所である。

三十分近く歩いたろうか、石碑に寄りかかっていると、「こんにちは」と挨拶する人がいる。今日、一緒に利尻島から礼文島に渡ってきた人だ。

京都の大学に通っているそうで、友達と車で北海道を回っているとのこと。彼は話し好きのようである。

「利尻と礼文では対照的ですな。利尻の山は険しいが、海岸線はなだらかだ。礼文の山は低いけれども、海岸線は切り立っている……」

桃岩の近くに立つと、水平線が弧を描いているのが分かる。日射しも柔らかく、心地よい風が吹いてくる。光に満ちた海を

しばらく眺めた後、彼と一緒に香深の町に下りてきた。一人になる。日記帳を広げて、岸壁の上に腰を下ろし、旅の記録をつけていた。

目の前には利尻島の島影が、手に届きそうな位置に見えている。沿岸を走る道路や建ち並ぶ家々まで、くつきりと目に映る。懐かしい友人と再会したような気分である。

海面にはカモメがたくさん浮かんでいる。「かもめの水兵さん」という童謡を思い出した。餌を見つけると、水上からジャンプして、勢いよく嘴を水中に突っ込み、海老や小魚を捕まえる。他のカモメが寄ってくると、あわてて呑み込んでしまう。時がゆったりと流れていく。

「愛とロマンの八時間コース」というのは、礼文島の最北端スコトン（須古頓）岬から島の西海岸をトレッキングするコースである。「北海道の三大〇チガイユース」と言われた「桃岩荘」が開拓したコースで、僕が宿泊した「礼文ユースホステル」でも、開催されていた。ただし、元祖の終着点が「桃岩荘」であるのに対し、今回は南部の元地^{もとち}地区を目指すことになっていた。「愛とロマン」というのは逆説的な言い方であって、実は「汗と涙」と言われるほど、長くて険しい道のりを踏破しなければならぬ。落石の危険もあるコースで、安易な気持ちでは参加できないし、もちろん、高齢者は無理である。けれども、それを共に乗り切ること。「愛とロマン」が芽生える可能性はある。朝食後、宗谷バスで香深からスコトン岬まで移動した。そこ

からの眺めは素晴らしかった。沖に海馬島トドが見える。周囲には高い木は生えていない。風が強いために、灌木かんぼくのほかは草花しか生えないのだ。しかも、寒冷な気候のため、高山にしか生えない植物を、海岸線でも見かけることができる。緑に染めたスポーツ刈りみたいに、海岸の地形がくつきり浮かび上がり、荒涼とした自然の美しさが広がる。

その日参加したのは、ユースホステルの十二名と、たまたま居合わせた男女二名。杵にとらわれず、「一緒に行こうぜ」って感じで、フレンドリーなところがいい。

丘を尾根伝いに登っていき、振り返ると稜線が青空に映えて、遠近法の絵画を見ているような気がする。スコトン岬が限りなく遠い消失点となり、そこから植物の根のように、ひよろ長い

岬が続いている。花はこぶりなものばかりだが、結構咲いている。固有種のレブンソウは、紫色の可憐な花をつけている。無数の花が雲のように寄り添うエゾノヨロイグサは、地味だがよく見かける花である。

風はかなり強い。あおられて海の反対側に吹き飛ばされそう。だ。両手を水平に伸ばすと、鳥にでもなったような気分になる。ゴロタ岬まで登ってくると、礼文島の西側の突端が、ゆるやかにカーブしているのを見下ろせる。よくここまで登ってきたなあ、とちよつとした達成感があるが、コースはまだ始まったばかりである。

スカイ
澄海岬は礼文島で一二を争う景勝地である。入り江をなす荒

削りの崖は、ところどころ草が生えるばかりで、青い海から垂直にそびえている。崖の頂は浸食が進み、針の山のように尖っている。日本離れした風景は、北欧かどこかの地形を連想させるが、氷河期にはこの周辺にも氷河が存在したらしい。

ただ、これも風が強かった。カメラのシャッターを切ろうとすると、体が揺さぶられて手ぶれを起こしてしまう。風の弱いところを見つけて、お弁当を開いた。昼食後、しばらく行くと、やぶの中に入っていく。一転して風はやみ、蒸し暑くなってきた。谷川で顔や手を洗うと涼しくなった。上から見下ろすと、木が生えているのは谷川沿いだけである。あとは草も生えない砂地である。

ロープを伝って崖を下りていく。そこから先は磯伝いに道なき道を進んでいく。海はかなり荒れてきた。絶え間なく恐ろしいうなり声を上げ、一気に岸へ押し寄せてくる。崩れる波の中で、昆布がくるくるもまれている。沖の岩場では黒い鵜が羽を休め、中の一羽は翼を広げている。

目の前に大きな岸壁が立ちはだかった。外側は波が洗っている。迂回する道は見当たらない。高さも数メートルはある。やむなくよじ登ることになった。女性もかろうじて越えられた。次の難所にはロープが張ってあったが、海に突き出した岩場を、波の合間を縫って通らなければならない。潮は次第に満ちてきているようだった。靴を濡らしてしまった人もいた。僕はさっと駆け抜けようとしたのだが、足が滑ってしまい、膝上まで波に洗われて、ぐっしより濡れてしまった。

行程も終盤に近づいてきた。礼文滝で一休みすることになった。緑の斜面を下る小川が、一気に垂直の壁から落ちてくる。ほっとしたわけだが、本当の難所はまだ先に控えていた。

今度は絶壁の岩場を、ロープ伝いに下りることになった。数人がロープにつかまっていたのだが、前の男性が足を滑らし、その反動で宙ぶりとなった。僕はロープをつかんだまま、押し倒される形となり、後頭部を激しく岩にぶつけてしまった。彼が早く下に行きたくて、垂直に岩場を下りなかったことも、災難の原因の一つだった。

小さなこぶが出来、多少出血していた。持参した菓をすぐにつけた。謝る彼に「大丈夫だから」と言っただけでも、火花が散るほど痛かった。この区間は落石の危険もあり、死亡事故も

発生したため、現在では通行が禁止されている。海岸の難所を越える醍醐味は、もはや過去のものとなったのだ。礼文滝のかなり手前、宇遠内からは島の東海岸、香深井に出るコースが推奨されている。

午後六時頃、元地の地藏岩の前に到着した。巨大なお地藏さんに見える大岩がそそり立っている。そこで喉を潤しているのと、ユースホステルの車が迎えに来てくれていた。戻るとすぐに食事をとり、入浴。ミーティングの時間には寝ぼけていたが、八時間コースへ行った人たちの間に、同じ困難を乗り越えたという連帯感が生まれた。

一難去ってまた一難

明日は一緒に塩狩温泉しおかりに行つて、ジンギスカンでも食べよう。八時間コースを歩いた人たちの間から、自ずと声が上がった。早朝に食事をし、元気を出そうと牛乳も飲んだ。八時発の稚内行きちのえの船に乗ることになった。

空は青く晴れ渡っていた。香深港の岸壁には、ユースホステルの人が見送りに来てくれていた。歌をうたつて別れを惜しんだ。港内は波が静かだったが、沖に出ると風が強くなってきた。次第にうねりが出てきて、甲板を突風が駆け抜けた。身震いするほど冷たい風だ。

船が大きく揺れだした。水しぶきがかかるようになったので、

甲板の中央に避難した。船の横揺れがひどく、浮き上がったかと思うと、次の瞬間、海面に叩きつけられる感じだった。数メートルのうねりで、海は大きく湾曲し、大しけのオホーツク海をゆくサケマス漁船にでも、乗り合わせてしまった気がした。次の瞬間、バシャーン！ 頭の上からバケツを空けられたように、大量の海水が降ってきた。体中びしょ濡れになった。甲板上はパニックとなり、皆転げるように船室の廊下へと駆け込んだ。

船が大きく横揺れするたびに、女性の悲鳴が上がる。僕は吐き気を催して、船室の畳の上に横たわった。すると、よろめいたおじいさんが、僕の体の上に倒れ込んだ。そこから抜け出すと、廊下に座り込んだが、やはり気分が悪いので、そのまま

ま横になってしまった。

ゴミ箱があつたので、口を当てると、今朝食べたおかずやら牛乳やらがあふれ出した。船員がビニール袋やごみを配っている。袋を一つもらって吐いた。吐いたのにまた吐きたくなつて、取り替えたゴミ箱に吐いた。いったい何回吐いたんだろう？

トイレは気分の悪い人たちが占領していた。赤ん坊が泣き叫んでいる。皆青い顔して廊下に転がっている。ああ、また大きく傾いた。このまま傾き続けたら、船は横転してお陀仏なのではないか。

僕は意識を失っていた。気がつくとも揺れは収まっていた。アウンズが入った。船は二十分遅れて稚内港に入港するという。一緒に船に乗っていた人たちも、吐き続けていたという話だっ

た。船を下りると、皆、怒りを爆発させていた。岸壁で記念撮影をし、夕方、再会を約して別れた。

夕方、塩狩温泉のユースホステルに集まった。名寄国道沿いの建物は古かったが、大きな池があつて、カヌー教室が開かれているらしい。ジンギスカンを食べながら、一ヶ月半もバイクで道内を巡っている人と話した。二十代後半で年が近かったことから、お互い心を開くことができたのだ。仕事をやめて旅に出たそうで、ユースホステルは大学生が多いから、浮き上がらないようにしているということだった。

こちらの話はもっぱら、礼文島での八時間コースと、今日の荒れた海についてだった。温泉に入った後は、食堂で紅茶を飲

みながら、三浦綾子の『塩狩峠』のモデルになった、命を捨てて人々の命を救った青年の物語を、ユースホステルの人に聞かせてもらった。

小樽市内のストーンサークル

ストーンサークルは環状列石と呼ばれ、イギリスのストーンヘンジが有名である。トマス・ハーデー原作の映画『テス』で、自分を犯した男を殺して死刑になるテスが、警察に捕られる場面で映される巨石のサークルである。ドルイド教の祭祀に使われていたと、信じられてきたというが、天文台なのか墳墓なのかなど、定説はまだ明らかでないらしい。あれほど立派なものではないが、ストーンサークルはインドやシベリア、日本では東北や北海道でも見られるものだという。

塩狩温泉を出発した僕は、小樽の運河沿いを散策した後、バスで忍路環状列石に向かっていた。函館本線なら蘭島らんしま駅から、

徒歩^{とほ}で三十分弱かかる。停留所で下りてしばらく行くと、遺跡から出土した土器や石器などが保存されている記念館、といっても物置のような小屋の前に出た。

向かいの商店のおばあさんに鍵を借りて、記念館の中に入った。そこには石臼、石斧^{せきふ}、石枕^{いしまくら}、石笛などが展示されていた。

それらの中で特に目を引いたのが、古代文字を刻み込んだ岩の塊^{かたまり}だった。

僕はそれを見つめるうちに、我々が普通考えるような文字ではない気がした。意味が解読できないのは、言語の「二重分節性」、音と意味の両面から分析できる言語の原則に、則^{のっと}っていないからではないか。それが動物のさまざまな叫びが、合図として用いられながらも、人間の言語とかけ離れている点なのだが。

が。

この文字を岩に刻んだ動機は何だろう？ 僕は刻みつけられた溝に、原始人の欲望が感じられてくるのだ。この文字とも絵ともつかない記号には、呪術^{じゆふ}的な力が込められているのだろう。中国伝来の呪符^{じゆふ}に通底する何かが……。

道を左に曲がり、少し坂を上ると、環状列石の遺跡があった。南北三十三メートル、東西二十二メートルの楕円形状に、縦長の石が二重に並べられている。この遺跡が持つ意味は、学術的にまだ解明されていないという。

僕は博覧強記の作家として知られた、コリン・ウィルソンの言葉を思い出した。歴史的事件の舞台となった地に立ち、直観的にその場面を想起することについて。

円は完全さを表すとともに、運動の軌跡を表しているのではないか。この岩の間を古代人が駆け巡ったのだろうか。祭祀との関連以外に、幾何学的な配置から、天文学との関わりが思い起こされた。

この種の環状列石が日本では、北海道、東北北部に見られる理由としては、夏に降雨量が少ないことがあるのではないか。日本人は歴史的に他民族と比べて、星に関する関心が薄いと言われてきた。曇っている日が多く、砂漠のように、快晴の日が続くことはまれである。比較的晴天にめぐまれる東北以北に、この種の遺跡が存在することは、蝦夷と呼ばれた先住民族の、星に対する信仰の可能性を示唆しているのではないか。

商店のおばあさんに鍵を返すと、少し道を戻った。先ほど曲がった所を反対側に進んでいくと、地鎮山巨石記念物に出る。それは小高い丘にあった。環状列石があるのは忍路の方と同じだが、中央部にある四角い穴が、この遺跡が墳墓であることを強く示唆している。

ところで、今回見た二つの遺跡から、僕はウイルソンにならって、ここで行われていた祭祀を想像した。環状列石は天上の秩序になぞらえたもので、占星術の黄道十二宮に相当するようなものではないかと。ここ地鎮山の頂で、死者の魂は星々の運に合わせて、夜空に昇天していったのだろう。

バス停に戻る途中、先ほどのおばあさんに声をかけられた。挨拶して帰路につく。小樽駅から快速電車に乗り、車中で緑が

かつた日本海を眺めていた。

記憶にかすむ函館山

その日は札幌で一泊し、翌日函館まで出た。駅前から市電に乗り、十字街で下りると、ゆっくり坂道を上っていった。七年前に日の暮れた函館山から、無謀にも徒歩で下りてきたとき見かけた風景だ。これほど精神の自由を感じるのは、あの旅以来かもしれない。

函館山のロープウェイは、駅舎も客車も新しくなっていた。山の上まで登った。西側の海を眺める。あの日は夜景が見えるまで、ここに留まっていられなかったが、今はもう青函連絡船も存在しない。津軽海峡線の発車時刻は、午後五時半前だから、北の大地との別れも差し迫っている。

まだ明るいのに山を下りなければならぬ。僕は胸がいつぱいになり、かつて夕日を眺めた場所に走っていった。海面は風いで、夏の光で白く輝いていた。

青森駅に着くと、急行「八甲田」に乗り込み、翌日の昼頃には帰宅していた。一人旅に出る前、僕は決まって億劫な気分を襲われるのだが、いざ出発してしまうと、旅をしている自分を、ごく自然に受け容れている。その間、自己の実存について、あれこれ思い悩むこともない。そのとき、そのときの感覚と感動に身を任せ、世界と一つになっていた……。

いきなり女満別空港へ

二回目の北海道旅行から、また五年の歳月が流れていた。その間に勤めていた日本語学校が廃校になり、職業安定所に通ったりした。三十歳過ぎてからの転職は、なかなかきついものがあった。不採用の通知が来るたびに、何だか自分が役立たずになってしまった気がした。

ようやく新たな定職について程なく、病気がちだった父が入院した。しかも、半年が経とうとしても、経過は思わしくなく、回復の見込みすら立たなかった。週末は病院通いで疲れがたまっていた。

幸い、病状が小康状態となったので、例年の夏休みのように

旅行することにした。ただし、急変した場合には、中断して帰宅することも考えていたが。

夏休みを長く取れないことから、今回は飛行機に乗ることにした。ところが、である。予約しておいた十時三十五分発の女満別^{まんべつ}行の飛行機に、乗り遅れてしまったのである。次の女満別行きは？ と見ると、十三時発である。

日本エアシステムの機内にいた。岩手あたりの上空を飛んでいる。雲は厚いが、先ほどまで見えていた積乱雲は彼方に去った。女満別空港は激しい雨で、行き先は釧路空港へ変更されるかもしれない。その場合、今日中にウトロにはたどり着けまい。何てこった！

雲間から北海道の大地が見えてきた。天候は回復してきたのか？ 釧路上空を通過すると、見渡す限り野山と田畑が広がる。チャイムが鳴り、予定通り女満別空港に着陸するとのアナウンスが入った。

あそこに見えるのは屈斜路湖か。かなり高度が下がってきた。ふたたび雲が増えてくる。飛行機の影が山肌に映っている。それは思ったより小さい。白いガスを抜けると、影は怪物のように大きくなり、機首の周囲が後光に似た丸い虹に包まれている！

空港からウトロ行きのバスに乗っている。お客が僕しかないなので、運転手とは時折おしゃべりしていた。今年は冷夏で天

気もくずつくことが多いそうだと。小清水こしみずの原生花園は、地味で小柄な花が一面に咲いていた。

斜里を過ぎた辺りから、少しうとうとした。オシンコシンの滝が、道路右側の崖に見えた。その先のトンネルを抜けると、漁港入口の海中に、岩山が二・三そそり立っている。ウトロのシンボル、オロンコ岩である。五年前に訪れたとき、目にした風景だった。記憶と現実を重ねていく。あの時の続きを夢見ている気がした。

バスは坂道を上っていく。ウトロ停留所の先、知床プリンスホテルまで連れていってくれた。前回と同じユースホテル「知床夕陽のあたる家」だが、僕が以前泊まった建物ではなく、一般用のホテルの客室を、相部屋の形で使っているのである。き

れいなのは悪くないが、ユースホテルらしい活気はない。

五年前に宿泊した建物のロビーで、台風が近づきつつある夜、アメリカ人の青年がギターを弾き、旅の話で盛り上がった思い出が、青春の記憶としてよみがえってきた。その時ふいに、ジョン・ヒューストン監督の「ザ・デッド」という映画のラストシーンが頭に浮かんだ。ジェームス・ジョイスの短編集『ダブリン市民』のうち「死せる人々」を、映像化したものである。なごやかなパーティーが開かれるのだが、そこに集う人々もやがて遅かれ早かれ、死者の世界に去って行くんだと、主人公が感慨に耽るシーンである。嵐の夜に若者たちが語り合った建物も、今は打ち捨てられて人影もないのかと思うと、すべては過ぎ去る無常というものが胸をよぎった。

地の果ての大自然

知床のユースホステルには、黒い縁の眼鏡をかけた秀才っぽい若者がいた。石川啄木の史跡を巡っているとか言っていた。大学を卒業してからは、文学青年にはお目にかかっていなかったから、ちよつと懐かしい気がした。

話が合ったので、一緒に知床半島を巡ることにした。彼は綿密に計画を立てていたので、それに合わせていけば、無駄なく時間が過ごせそうだった。

翌日は雲が広がっていた。一緒に定期観光バスに乗り込んだ。まずは知床峠に向かった。五年前に訪れたとき、駐車場に毛布を敷いて、夜空の星を眺めたものだったが、今日の峠は濃霧で

国後島おろか、羅臼岳らうすだけの影すら目にできない。十分ほどでバスに乗り、カムイワツカの滝へ向かった。

知床五湖までの道は、以前と異なりすっかり舗装されていたが、その先はまだ砂利道が続いていた。過去の記憶とオーバーラップしてきて、区別がつかなくなりそうだった。カムイワツカの滝では一時間半近く時間があつたので、文学青年と滝登りすることにした。

早瀬の岩は滑らかに削られていたが、流れに含まれる鉱物のせいで、緑色がかっているのに気づいた。むしろ、川底を歩いた方が滑りにくい。小さな滝は両手を使えば、軽く這はい上げられた。早瀬と小さな滝が、幾重にも重なっている。

滝を登っていくうちに、流れの温度が上がってきた。硫黄の成分がきついので、金属類はたちまち腐食するだろう。カメラと時計はビニール袋に、厳重に入れておいたのだが、写真を撮りたくなかった。シャツターを切っていると、青年に後れを取ってしまった。四つん這いになりながら、いくつか滝を越えていくと、前方から歓声が上がった。

滝壺が露天風呂になっていた。みんな水着をつけている。見回してみたが、文学青年の姿はない。さらにその上を目指して、崩れやすい崖を這い上っていたのだ。しばらくして、彼は戻ってきた。その先の川は熱湯になっていて、道もかなり険しいことから、あきらめて下りてきたという話だった。

僕はシャツを脱いで、パンツ一枚になった。湯の中に入って

いく。お湯の温度は三十九度くらいというから、体はなかなか温まらない。滝壺に近づくにつれ、ジェットバスのように流れがきつくなり、岩につかまらなければ一箇所にとどまっていられない。

本当は滝壺の真下まで行きたかったのだが、そこは背が立たないだろうし、渦を巻いた流れに足をとられてしまう。戻りかけて振り返ると、しぶきが目に入ってひりひりした。三十分以上つかっていた気がする。彼と交互に写真を撮ったりした。青年は快活そうに笑って言う。

「また、来たいな……」

僕も以前、カムイワツカの滝の下まで訪れながら、登るのを諦めていたので、ようやく実現できて胸がいっぱいになった。

あとは滝を下るだけだったが、行きよりもはるかにきつかった。転ばないようにしゃがみながら下りていくと、しぶきが飛び散って、腿ももまで上げたスボンもびしょ濡れになった。二人そろって尻餅をつき、滝を滑り台のようにずり落ちる中年の夫婦もいた。

高級なビデオで滝を撮影していたおじさんは、足を滑らせて機械ごと硫黄の川にもぐってしまった。十万円はしたであろう最新機器も、修理不能となったに違いない。

滝を下りきったところで時計を見ると、十二時五十分、もう集合時間である。道ばたに子ギツネが二匹出てきた。餌をもらいたいらしく、近寄ってきたところをシャッターに収めた。

今回も知床五湖には寄ったのだが、あいにく曇り空であるため、知床連山も五湖に映る山並みも眺められない。シラカバからのぞく湖水の風景は、信州あたりでも見られそうなものである。ただ、ここがヒグマの生息地であることを忘れてはならない。売店で食べたコケモモのソフトクリームの、さわやかな甘酸っぱさは今も記憶に残っている。

ウトロに戻る途中、知床自然センターに寄ることにした。百平方メートルを八千円で買うことで、開発から知床の自然を守る運動があるのを知った。その時点ですでに九七・二パーセントの民有地が買い上げられ、開発が放棄された草原には植樹がされ、百年後には森林が復活することを目指しているという。

自然センターの大スクリーンに、晴れ上がった知床の自然が

映し出されていた。知床硫黄山の上空をヘリコプターで越える
辺りは、かなり迫力が感じられた。先端の知床岬まで船で回れ
ることを知り、僕も行きたくなくなってきた。

バスの時刻まで余裕があるので、オホーツク海側の崖にある
フレペの滝を見ることにした。山道をぐつと下っていくと、サ
サの草原が続くので、ヒグマが出てこないように、手を叩きな
がら進んでいく。

展望台までは二十分もかからなかった。小さな崖が海へ突き
出し、流れ下っていく川が直接、波のしぶきに注いでいる。そ
の姿から、乙女の涙とも呼ばれている。いかにも知床らしい風
景である。崖の下はウミウなどのコロニーとなっている。天売島^{てうりとう}
の風景とイメージが重なった。

手つかずの自然というものは、こういうものを指すのだろう。
下の岩場は海鳥の羽と糞で、白い斑点模様となっている。よう
やく静かな所に出られたという感じだった。林の奥からはエゾ
シカの親子がこちらをのぞいていた。

知床自然センターの前でバスに乗り、今度はオシンコシンの
滝に向かった。高さは八十メートルあり、崖の途中で左右に分
かれています。左側は磨かれた岩肌を滑るように、右側はあらん
限りの力を発散して豪放に。アイヌ人はここを、チャラッセ・
ナイ（滑り落ちる川）、もしくはオシユンク・ウシ（エゾマツ
の群生する所）と呼んだ。それがオシンコシンの語源である。
「ここは本土にある滝と違うね」と、僕は文学青年と語り合っ

た。白糸の滝にしても那智の滝にしても、日本画となるような、日本的美意識の枠の中にはまっている。ところが、このオシンコシンの滝は、下に向かうにつれて末広がりになり、豪快なまでに力を謳歌している。周囲に響き渡る音にも生命がこもる。絵画の枠の中に収まりきらないのだ。とにかく、存在感に圧倒されてしまっていた。

水しぶきを浴びながら、ただただ感嘆していた。腹の底に伝わってくる振動に、魂を揺さぶられながら。下において滝の全容を眺めていると、バスが少し早めにやって来た。

翌日は雲が多かったが、文学青年とともに船で知床岬に向かうことにした。前日の夜に予約しておいたのである。ユースホ

ステルの車で港まで送ってもらった。

岬に向かう船は漁船を転用したものだ。案内してくれたおじさんは、行政について手厳しい批判をしていた。林道は知床大橋より先は通行止（その時点では土砂災害で、一つ手前のカムイワツカの滝まで）なのだが、国立公園に指定される前年に、林野庁が強引に巨大な鉄橋を架けた。国立公園になり一般車の通行が禁止されたので、結果的には役立たずのまま、補修費ばかりかかるようになってしまったというのである。

知床の民有地を個人が八千円で買い上げて自然を守るナショナルⅡトラスト運動にしても、町長はそれを寄付だとして町有地だと言い出したが、これは詐欺ではないかとも。

木が伐採されたために、切り株や土砂が海に流れてしまうの

を防ごうと、砂防ダムを造ったのはいいが、鮭が遡上できなくなってしまう。そこで鮭の人工孵化を始めたのだが、川を遡上する前に鮭を捕らえるため、オジロワシなどは餌がなくなり、絶滅の危機に瀕する一方、鮭が増えすぎてプランクトンが減り、小柄な魚ばかりになってしまった。昔の鮭は大柄でずつとおいしかった。おまけに獲れすぎて、サンマより安くなってしまう。

イルカも乱獲されて、余り姿を見せなくなった。というのも、他県の漁民が捕らえたイルカの肉を鯨と偽って、スーパーなどに流しているからで、一般の消費者はだまされるかもしれないが、漁師の口はだませないとも。

ロシアはアムール川流域の樹木を伐採して、日本に輸出して

いるが、森林が減少した結果、川の水量が減り、流水が少なくなつて、豊富だったプランクトンの発生も減少し、それを餌とする魚類も同じ運命をたどっている。人間が自然をコントロールしようとする、それまで保たれていたバランスが崩され、思わぬ副作用が出てしまう。人間がなすことなど、自然の仕組みを前にしては浅はかなあがきに過ぎないという点を強調していた。

その間にも、船はぐんぐん岬に向かって進んでいく。幌別川にかかるスロープ状の橋は、カムイワツカへ向かう道に通じている。岩尾別川には鮭の人工孵化場がある。左方にはルシヤ山、右方には羅白岳が見える。知床硫黄山は頂上が三角の山で、昭和十(一九三五)年の噴火では、大量の硫黄が噴出して、大も

うけをした人がいたという。

その先、知床岳までの間は山並みが切れて、風の通り道になっている。確かに、灰色の雲が谷に沿って伸びており、おじさんの話していたとおり、にわかに関風が強くなって、波も荒くなってきた。

白波が砕けるたびに、ばしやんばしやん、船の舳先へびさきからしぶきが飛ぶ。上下左右に大きく揺れるたびに、ズボンがじつとり濡れていく。長袖の上に薄手のジャンパーを羽織っていたのだが、それでは間に合わず、リュックサックを抱え、身を縮こまらせていた。文学青年はヤツケのフードをかぶり、寒さに耐えかねた様子。女の子たちも毛布をかぶって、身を切る風をひたすらこらえていた。真夏でこの寒さとは！ さすがオホーツク

海である。

「あつ、熊がいる！」

強風にあおられながら、岩場の続く海岸線に目をやる。確かに茂みから見え隠れしている焦げ茶の頭は、ヒグマのもののようにうだ。ただし、望遠鏡がないので、全身を目にすることはできない。

ここ知床半島では、ヒグマが番屋近くに現れることがあるが、お互いに距離を置いて無視し合うことで、共存することが可能になっているというのだが、半島の北半分が立ち入りを制限されている点が大きい。

番屋の脇を通ると、ウミウのコロニーがあり、岩場が糞で斑まだら状に白くなっている。知床岳を過ぎると、やがて、折り返し地

点の知床岬が見えてきた。先端は平らで樹木がない草原になっている。

僕はかつて旅した下北半島のことを思い出した。津軽海峡の出口はこのように、波打つ草原が広がっていたからである。

「尻屋崎には馬がいたんですか」と文学青年が尋ねた。

「牛の方が多かったな。でも、家畜がいると、生態系を壊していくからなあ」

青年は髪が額にかかるのも気にせず、岬の先端を眺めながら、あの上で寝っ転がってみたいなあ、とつぶやいた。

船がUターンしたので、座っていた方は海側になってしまった。やむなく向きを変えて、甲板の少し高くなったところに正

座した。

帰りは行きよりも海岸線に近い方を通った。岩場にかなり近づくと、跳ね返ってくる波で、船は大きく横揺れする。また、漁網の位置を示す浮きも避けていくので、船はジグザクに航行していく。

「熊だ！ 船の進行方向正面」

先ほどは全身の形も分からなかったが……。僕と文学青年は、船べりを伝って舳先の方に駆け寄った。確かにいる。まだ若い黒いヒグマだ。崖の下のかきむらを、野草を食べながら移動している。緑の中から現れたり隠れたり、四本の足の動きまでくつきり見える！

次に目に入ったのは、オジロワシのつがいだ。生ある限り、

夫婦は別れ別れになることはない。ウミウのコロニーも、岸から十メートルぐらいいまで近づくと、鳥たちの羽ばたくさまや、巢から顔を出す雛ひなの姿まで、ひしめくように暮らしているのが見える。切り立った崖にしか楽園を築けぬのは、気の毒なようではあるが、見晴らしが素晴らしく、狩りをするのにも、巢立ちにも最適だからだろう。

知床五湖の下にある崖に近づく。第一湖からしみ出た水が、滝となって海にそそいでいる。黄緑色の苔こけが流れに沿って生えている。ひかりごけと呼ばれるもので、これをもとに、武田泰淳たけだたいじゆんは同名の小説を書いたのである。

難破という生死の境をさまよう状況で、人肉を食うか餓死するかという選択が迫られる。極限状態を象徴するものとして、

ひかりごけが用いられているのである。実際に近辺で起きた事件と、その地の鮮烈なイメージを結びつけたところに、この作品が成功した鍵があると、阿刀田高あとうたかが書いていた。

行きに見た岩尾別川、フレペの滝などを眺めているうちに、オロンコ岩、ウトロの町並みが見えてきた。時刻を見ると、午後二時二十分。船は十分後には、出港した港に戻ったのだった。

「疲れているんだったら、まだ羅臼行きのバスに間に合うから、乗っていった方がいいんじゃないですか」と文学青年が言った。出会ってから行動を共にしたので、別れを惜しみたかったのだが、言葉に従うことにした。いくら仲良くなったとはいえ、それは旅の間だけのことと割り切つて。写真を送ってあげるよと言つて別れた。

羅臼行きのバスに乗り込んだ。半島の中央にそびえる円錐形えんすいけいの羅臼岳は、見る見る麓から雲に隠れていき、峠に達する頃には、霧の中に包まれてしまった。道の両側はかなりの残雪が、亀甲状にひび割れて谷間を覆っている。

文学青年と別れて、心の中に穴が開いていた。これが旅なんだと、平静を装っていたけれども。森繁久弥もりしげひさやの「知床旅情」で歌われた里に到着した。下り立おった羅臼の町は、厚い雲の下で息を潜めている。さびれているというか、ウトロのような活気がない。若者の姿はまれで、温泉での療養に訪れる中高年の男女が目につく。

次の宿泊地、中標津なかしべつに向かうため、釧路行きのバスに乗り換

えた。国鉄民営化の数年後まで生き延びた標津線も、今やくさむらの中に埋もれている。並木の間を走る今はなき姿を思い描き、車窓から路線の跡を探っていた。

トドマツの白い骨

父は生前、中学や高校で国語を教えていたが、若いときは社会科も担当させられたらしい。その証拠に、書棚には教員向けの地図帳が並べられていた。小学生だった僕は、日本地図を見ていると、地形から風景を想像したりしていた。奇妙な形から幼い心をとらえたのが、朱鞠内湖と野付半島^{のつけ}だった。

前の日に中標津に泊まった僕は、根室海峡に突き出た前髪のような野付半島と、砂の岬（アイヌ語のオタエトウ）に囲まれた湾、尾岱沼^{おだいしとう}に向かっていた。標津のバスセンターに向かうと、トドワラ入口までのバスは運休している模様だった。観光船も時刻表に載せてある便が運航していないところを見ると、それ

だけさびれてしまっているのだろう。

貸し自転車で行くことにした。野付半島の付け根までもかなりの距離があったが、それから先は、ひたすら直線の道が続いている。規則的に並んだ左右の電柱の先には、平坦な草原が広がっており、アザミなどの赤や黄色の素朴な花がちらほら咲くばかり。乳牛のホルスタインのほか、茶や黒の馬が放牧されており、母親の乳を吸っている子馬もいる。

野付半島は時折くびれ、道路と狭い砂浜だけになる。しばらく行くと左右に広がり、ナラの林が分布している。幹はすでに枯れ始めている。ゆっくり大地が沈降するさまを、ナラワラはありありと見せつけるのだ。

一本の木が枯れていくと、すぐ隣の方も弱ってくる。やがて

その隣も枯れてといった具合に、次々にナラの墓場が広がっていく。手前の沼地は赤紫色のサンゴ草が繁茂している。

人間による森林破壊も、同様の過程を経て進んでいく。植物は互いに支え合って生きている。一郭が崩されることで、わずかな旱魃や病害虫によつて活力を失い、そこで暮らす生態系も崩されていく。

トドワラ入口に着いた。「トドワラ定食」というのがあった。イカ、ホタテ、しめ鯖の刺身、焼き鮭、アサリの味噌汁、漬け物、ご飯。それに甘辛団子風に作った芋団子を追加した。「こめちち」という発芽した玄米のエキスと人参の汁に、牛乳を混ぜた飲み物をぐい飲みした。

食堂を出て見物することにしたが、自転車の乗り入れは禁止されている。馬車もあつたが徒歩で行くことにした。原生花園で一番目につくのは、ハマナスである。これは実を梨になぞらえて花梨と言ったのが、なまつたのだという。群がるように生えているのは、小ぶりで可憐な薄紫の花、ハマフウロ（浜風露）である。

黄色い花が太い茎に鈴なりに咲いているのは、センダイハギ（先代萩）、ユリに似たオレンジがかつた黄色い花は、エゾゼンテイカ、別名エゾカンゾウである。これらの花はその姿に似てほのかな匂いしかしない。人が種をまいたわけではないから、華麗に咲くことはないが、生命力の旺盛さには目を見張るものがある。

花の咲く道を行くと、後ろから馬車がやって来た。その先で道は二手に分かれる。一つは木道が干潟を越えて石の橋へ連なっている。いま一つはトドワラの方向へと伸びている。

左方の道を選び、橋を渡って砂浜へと出た。枯れ草を踏みしめ岸辺を行くと、その先には青く塗られた鉄橋が海中を進み、観光船の栈橋へと至る。侵食されてゆく内湾では、中央の砂州の部分が、低い箇所から海水に浸され、林は小島のように切り離されている。

台風に襲われると、根元の土は洗い流され、あとは死を待つばかりとなる。人間は残酷だから、今は青々と茂るトドマツが、早く立ち枯れすればいいと思っている。というのも、トドワラのマツはほとんどが倒れ、根すらも朽ちて正体を失っているか

らだ。荒涼とした風景そのものが崩れ、白い骨に似た凄みも消えつつあるのだから。

砂浜が妙にさくさく鳴るので、しゃがんでみると、二、三センチのトンがり帽子みたいな巻き貝が、無数に落ちているではないか。一つを手にとってみると、まだ生きているらしく、体を守るふたが付いている。

野付半島に砂州が最初に出来たのは、三千年ほど前のことらしい。それから隆起と沈降を繰り返し、現在のような先端の曲がった枝状の姿になったという。外海の方は波に削られ、内湾は沈降して海水に浸されていく。その一方で、砂州の先端はここ数十年の間にも伸びている。

二時間ほどトドワラの中を散策していた。道は竜王崎の灯台まで伸びているが、単調なアスファルトの路面が続くばかり。丹頂鶴たんちょうつるの営巣地にはたどり着けそうにない。干潟では鶴が五、六羽海中で羽を休めていた。一步一步足を進めるたびに、首が連動して揺れている。手前に原生花園が広がっているため、人に脅おどされることもない。

カモメが魚をつかんで飛び上がった途端、それを狙ってトビが襲いかかる。びっくりしたカモメは海中に獲物を落としてしまふ。怒り狂ったトビは、しばらくカモメを追い回していたが、ついに疲れたのか、電柱の上で一休みする。

魔の湖を再訪する

翌朝、宿泊した中標津を発ち、標茶しべちやから川湯温泉行きの列車に乗る。終点で下りてバスで摩周湖に向かう。途中、硫黄山（アトサヌプリ）に寄った。二十一歳の時以来だから、実に十二年の歳月が流れたことになる。当時はソフトクリームを移動販売する車が出ていたが、今ではレストハウスが建てられている。

巨大噴火で山頂が吹き飛んだ火山を、バスはゆっくりと登っていく。いきなり視界が開けた。カルデラの青い水面が覗いている。摩周第三展望台で下りたのは、僕ただ一人だった。これは運がいい。しかも快晴で、湖面は一点の曇りもなく見渡せる。にぎやかな第一展望台で下りるのは、魔の湖の魅力をまだ知ら

ない人間である。

湖の中央に突き出した中の島、カムイツシユの見える辺りにたたずんでいる。かつて訪れたときは、少し霧が出ていて風が冷たかった。観光バスが去ってしまえば、沈黙だけが支配しているような趣おもむきがあった。今日は湖面がくつきり見える。アイヌはこれを魔の湖として恐れていたというが、確かに水面の青さは異常に見える。

風が吹いていても、時折白い波頭が覗くだけで、波らしい波も立たない。日がかげると、湖面はいっそう青さを増す。吸い込まれるような美しさだ。高山植物の咲く崖上から、一気に身投げしてしまっても惜しくない、もしこの湖が我が物となるなら

らば。この魅入られる美しさを、アイヌは魔にたとえたのだろう。

緑が覆うカルデラ内部と、濃い青のコントラストが際立っている、まるでこの世との境界であるかのよう。湖の底からは地下水が湧いているのか。火山ガスが溶け込んでいて、元来は魚も生息していなかった。湖面までは切り立っており、近づくことができないことで、なおさら心を奪われる。

タカがはるか下方を旋回している。それだけ高い位置から眺めているわけだ。対岸のカムイヌプリの中腹辺りの高さを、悠然と翼を広げて飛んでいる。生きる者を拒絶するか、さもなければ呑み込んでしまう魔力に耐えながら。下手に崖に近づこうものなら、湖面に叩きつけられることだろう。

鉏路川をカヌーで下る

屈斜路原野のユースゲストハウスに泊まった。ここは大変人気があって、予約を取るのも容易ではない。プロの板前の腕を持つオーナーによる和食は、だしの効いた上品な京風の味つけである。食事だけでも満足してしまうが、このユースホステルはさまざまなイベントも企画している。

朝食を終えてから、少し散歩することにした。ユースホステルの前はビート畑、その先に広がる白い花はジャガイモ、紫かがった花もその一種で、ベニマルという品種だそうだ。黄金色に穂が直立し、遠目には絨毯じゅうたんのように見えるのは麦畑である。これだけ広い畑の農道を歩きながら、人っ子一人いない。中

原中はらちゅうや也訳のランボオ詩集を朗読しながら歩く。鳥のさえずりに耳を傾けながら。

十一時少し前に、カヌーを載せた車に乗り込んだ。長靴にヤツケ、それに救命胴着を身につけた。スタート地点は屈斜路湖の湖畔、鉏路川へ流れ出る手前である。僕が乗り込んだカヌーは三人乗りで、前はヘルパーの女性、後ろはヘルパーの男性。三人一組で、合計二艘にせうで川下りすることになった。

ゆっくりと湖面を進んでいったが、橋をくぐったところで、川の流れの意外な速さに驚く。幅はまだ広くはないので、二級河川といったところか。川岸には木の枝が倒れかかり、水中には倒木も横たわっている。茂みの下の岩場にはアオサギがいる。

辺りには人工物が何もなかった。

カヌーを操縦する上で、一番後ろの男性の役割は大きい。僕自身も多少は櫂かきでこいでいたが。しばらく進んだのち、淀みで休むことになった。ここは鏡の間とも呼ばれ、川底から清水が湧き出ている。水温も七度ほどで、本流と比べてかなり冷たい。底では黄緑色の水草がなびき、表面にいっぱい空気の泡をまとっている。水中にはウグイの稚魚が群がり、岩の上にはカモの幼鳥みなぞこが留まっている。

水底みなぞこに根を張ったクレソンが、水面から白く可憐な花を覗かせている。川のあちこちに小さな渦があり、清水がこんこん湧き出ている。ポイリングと呼ばれるもので、上を通るとカヌーは左右に揺れる。

同じ川でも進む側によって、かなり流れの速さが異なる。ゆるやかな淀みを探し、カヌーを止めると、櫂をテール代わりにして、お握りとお茶で簡単な昼食をとる。中州の茂みに隠れていると、アフリカのジャングルを舞台にした作品、コンラツドの『闇の奥』の一場面を思い出してしまう。

カヌーを本流に戻した。しばらく一直線に進んだところで、正面に泡立つ早瀬が見えてきた。先に行くカヌーは激しく揺さぶられ、しぶきを浴びている様子。続いてこちらも早瀬の中へ。前の女の子と僕はこぐのをやめ、後ろの男性にすべてを任せる。前日にはここでカヌーの一艘が転覆し、泳ぐ羽目になった人がいるとのこと。うねるような急流では、たとえ救命胴衣をつけていても、泳ぐのは至難の業だったろう。

前後に激しく揺れたけれども、左右に傾くことはなかったの
で、難なくゴールにたどり着けた。前の女の子はびしょ濡れに
なっていたけれど。やすらぎとスリルが同居した、貴重な体験
だった。

ユースゲストハウスに戻った後、マウンテンバイクでサイク
リングした。屈斜路コタンアイヌ民族資料館に向かった。横に
建つチセ（アイヌの民家）の前では、アイヌのお婆さんが民芸
品を売っていた。民族の文様もんようを刺繡ししゅうした巾着を買った。

資料館には祭祀に関する資料や、漁労に用いた丸木舟などが
展示されている。これに関しては、白老のポロトコタンでも見
たことがある。アイヌは縄文人が小進化したと言われるが、オ

ホーツク海沿岸の民族とも混血しているのだろう。別の店で文
様入りのバンダナとムックリ（口琴）を買った。そこでアイヌ
の衣装を着せてもらい、写真も撮ってもらった。

和琴半島わことを目指した。サイクリングの途中で、「屈斜路湖一
おいしいイモダンゴ」というのを食べた。ジャガイモに片栗粉
を混ぜ、醤油と砂糖のたれをからめたもので、素朴な味だが食
べ応えがあって飽きない。カルデラ湖の岸辺に腰を下ろし、水
面を行くボートや、網を持って魚取りしている子供たちを眺め
た。

釧路湿原の展望台

翌日は雲が多かった。釧網本線の塘路駅とうろで下車したが、駅前には商店が一つと、ライダーハウスがあるばかり。とりあえず、二つの川が合流する二股と呼ばれる所に向かった。ゆるやかに流れる川が、蛇行しながら合流する地点で、ここまで来ると釧路川も川幅の広い、平原を流れるにふさわしい風格を持つようになる。

川ではカヌーが滔々とうとうとゆく流れに身を任せていた。昨日の急流も素晴らしかったが、平原をゆったり進み、地平線を眺めるのも良かったろう。ただし、上流のような清らかさは、すでに失われていたが。

その後、塘路湖に沿って進み、サルポ展望台に登った。縄文海進によって内陸に入り込んだ海は、気温の低下ともに沖に退き、かつての湾が湿原へと変化したというが、残された海が下方に広がる塘路湖となった。いわゆる海跡湖である。

塘路からはノロッコ号という、釧路湿原観覧用のトロッコ列車が出ていた。遊園地の乗り物のような車両を、ディーゼル機関車が時速三十五キロののろろ運転で引いていく。

湿原は丈の低い草木しか生えない。日本で唯一地平線が見られる場所だ。アフリカの平原でも眺めるような自由がある。視界に入る広がりすべてが、自分の魂の中に取り込まれる解放感。隣の席にバード・ウォッチングをしているおじさんがいた。

「あそこを見てみる。ツルがいるよ」

民話の中にしばしば登場しながら、ビデオでしか見たことがなかった鳥が、小川の中で何かをついばんでいる。近くに障害者らしい娘さんと、お母さんが座っていた。ツルの姿を見て幼児のような純真さで喜ぶ姿に、お母さんの方も幸せそうに微笑んでいる。

他に何があっただろうか。何もないことが素晴らしい。北海道の中で自然を満喫したかったら、やっぱり道東だな。車内はなごやかな雰囲気であまっていたが、まだ釧路湿原の一部を垣間見たに過ぎない。

釧路駅に出た。駅弁のカニ飯を食べていると、十二年前に来

た時のことを思い出した。春採湖のそばのユースホステルに泊まったんだっけ？ アナウンスに混じって、カモメの鳴き声があるのも港町ならではのでないか。

実は、もう一度しっかり、釧路湿原を見ておきたい気持ちで募っていた。一周する観光バスがあるというので、迷った末に乗ることにした。本当は車かバイクがあれば、自分の好きな場所でのんびり過ごせるわけだが。観光バスを毛嫌いするのはもったいない、限られた時間で要所をめぐってくれるのだから。

釧路空港経由でまず、丹頂鶴自然公園へ向かった。ここは柵の内側で自然に近い形でツルを飼い、人工孵化も行っている。ただし、飛び立てないように、羽の一部を切っているらしい。これではツルの魅力は半減する。湿原で自由に羽ばたく姿を思

い浮かべれば。

数ある展望台の中で、コッタロ湿原展望台は圧巻だった。高台の位置から真下に広がる沼と小川の流れ、三方に広がる草原を一望できるからだ。湿原のあちこちに、一体何羽の丹頂鶴が生息するのだろう。

ここは縄文時代に海進し、湾が広がっていた所である。六千年前に同じ場所に立った人は、午後の日射しに輝く海原を眺めていたわけだ。午前中に見た塘路湖も、取り残された海が淡水化したもの。長い歴史の中で、海は沖へ沖へと遠ざかっていった。湿原の乾燥化は、人の手によるものだけではなかったのである。

やがてこの湿原も草原となり、歳月を経て鬱蒼とした林へと変わっていく。大雨の後に残された水溜まりが、日に照らされ干上がっていくようなことが、ここでは人間の目には分からぬ速度で進んでいく。湿原に生きる者たちの運命を左右するのは、大地を動かす大きな力である。コッタロ湿原展望台は、自然の営みの男性的な側面を垣間見せてくれた。

それに対して、釧路湿原駅に近い細岡展望台は、いかにも女性的な温かみを感じさせる。平らな草原が彼方まで続き、滔々と流れる釧路川が蛇行する。ほとんど標高の差はない。湿原においては、川は気紛れに流れを変える。跡には三日月湖が、魚や水草とともに残される。

西日を浴びた湿原に、高い木はまばらにしか見えなかった。

一面黄緑色に萌もえている。川の兩岸のみが、灌木の緑に映えている。小さなことにはこだわらず、心の赴おもむくままに流れを変える川。大きな懐ふところを思わせる草原の広がり、母性的なやすらぎを感じたのは、自分だけではなかったらう。

翌日、時間を持って余した僕は、米町公園よねまちに足を運んだ。展望台から眺める風景は、横浜でよく見かけたもので、ちつとも変わり映えしない。ここには石川啄木の『一握いちあくの砂』に収められた歌碑が建っている。

しらしらと氷かがやき千鳥なく 釧路の海の冬の月かも

知床のユースホステルで出会った、啄木の史跡を巡っている文学青年のことを思い出した。彼もここに足を運んだのだろうか。

その日の昼下がり、僕は釧路空港から、羽田行きの飛行機に乗った。機内では旅の記録をつけていた。最初に飛行機に乗り遅れるというハプニングはあったが、結果的にはいい方向に進んでくれた。一面の雲海の下は青空が広がり、熾しれつ烈な光線が差し込んでくる。高度が上の分だけまぶしい。

空気が澄んでる旭川

三度目の旅行から、しばらく僕は北海道に足を向けなかった。入院していた父は旅行の翌年に亡くなり、それから沖繩、小笠原、韓国、チベット、青海省など、行動の幅を広げていった。ところが、二〇〇二年に日本語の研究をするために、不惑の歳を前にして、大学院に入り直すことになり、一転して旅行の費用を工面くめんするのもきつくなった。

それからは信州や東北など、比較的近場を巡ることが多くなった。今回、北海道を旅したときには、何と五十の坂を過ぎていたのである。鏡で顔を見なければ、とても信じられないことだが。

父が亡くなったとき、僕は祖先が生きた静岡県富士市を訪れ、先祖代々の墓に詣でたり、曾祖父の戸籍を調べたりして、自分のルーツをたどろうとした。そして、今度は友人のお父さんが亡くなり、幼いときに父親が育った名寄の家、今は存在しない家の跡を求めて、旅することになった。僕はそれに同行したというわけである。

ようやく秋らしくなった九月の末、職場での仕事を片づけて、慌ただしく羽田に向かった。出発は午後三時半となっていたが、飛行時間そのものは一時間ちよつと、五時過ぎには新千歳空港に着陸した。

懐かしの北海道だが、晴天だった東京とは打って変わり、通

り雨が降っていた。到着ロビーに向かうと、友人が待っていた。久し振りだったので、話題が尽きることはない。切符も手配してくれていたのも、そのまま、旭川行きの特急カムイ号に乗車できる。新空港の地下まで支線が延びているのだ。

北海道の涼しさには驚いた。クーラー効き過ぎといったところで、上着を一枚羽織ることにした。以前は八月か九月初旬までに来ていたので、気温の低さは予想していたのだが。しかし、これはまだ序の口だった。

旭川駅に到着したのは、午後七時半。たしか低いところを走っていて、車窓から町の様子も見えたはずなのだが、何と高架上の新駅となっていた。ホームに下り立った途端、余りの寒さに身震いした。気温は十度、九月末にして真冬並みじゃないか。

とりあえず、ホテルにチェックインした。夕食は予約していなかったのも、外で腹ごしらえすることになった。

旭川の大通りの広さには驚かされた。何で広いのかというと、冬の積雪を考えてのことらしい。積み上げられた雪のために、道幅が狭くなることを見越して、道路が建設されたというわけだ。

夜の空気は身が引き締まる分、冷ややかで澄んでいる。車の交通量が少ないということもあるが、原発事故による汚染物質が舞ってないためだろうか。こんなに空気がおいしいのかと、久し振りに実感したのだった。

友人は札幌の出身なので、北海道の人なら誰でも知っているという、みよしのの餃子に連れていってくれた。カレーと一緒に

に食べるところが、北海道ならではののだそうだ。確かにシンブルながら、B級グルメの味がする。しかも、セットで五百円足らず。ただ、旅行の初日の夕食としては、ちよつぴり物寂しい。

夜道を歩いていたら、旭川ラーメンの店が開いていた。濃厚な味噌味が特徴で、肉と野菜の旨味がよく出ている。具を食べるたびに、口の中に新たな味わいが広がる。食べすぎではあったが、これは本当にうまい！

静まり返った朱鞠内湖

翌日はやや雲が多かった。ホテルをチェックアウトすると、旭川駅近くでレンタカーを借りた。士別しべつ経由で朱鞠内湖に向かうことになった。朱鞠内とはアイヌ語で *suma-ri-nay* 「石が高くある川」を意味し、昭和の初めまでは大地を川が流れるだけだった。自然の湖のように、変化に富んだ美しい湖岸を持つが、雨竜川を堰せき止めた巨大な人造湖なのである。

なぜ訪れたかったかという点、幼い頃に父の地図帳で見つけたとき、大きさと入り組んだ複雑な湖面に、興味をそそられたからだ。確かに、朱鞠内湖は湛水たんすい面積では、現在でも人造湖日本一の広さである。原生林に囲まれた湖面は、靄もやに覆われ

た神秘的な顔も見せる。

僕が二回目に北海道を訪れた一九九〇年代初頭は、まだ湖岸を深名線のディーゼルカーが走っていた。雪深い日本一の厳冬地帯でのダム建設は難工事で、鉄道が機材の運搬に使われたのだという。

朱鞠内湖の水面が見えてきた。すでに昼近くになっていた。高台に車を止めて、丘の上から見下ろした。水没をまぬかれた場所は、岬や小島を形作り、白みかがった青い水に囲繞いにようされている。海岸線のように入り組み、澄み切った静謐せいひつな空気に満たされている。

展望台から下って、キャンプ場まで移動した。湖の岸边まで

はかなり距離があった。天然の湖のように、岸边がゆるやかに湾曲している。湖水は澄みきっており、水面にはほとんど動きがない。氷水のように冷え冷えとして、凍ったような美しさを呈している。鳥の声も時折聞こえる程度で、静まり返っており、小島に生える白樺しろかばの根元を、いまだに靄が漂っている。

後ろの丘には慰霊碑が建っている。ダムが完成したのは昭和十八（一九四三年）。出かせぎの日本人、強制連行で連れてこられた中国人や朝鮮人が、タコ部屋で寝起きをさせられ、劣悪な条件で働かされていた。極寒ごくかんの気候と難工事による事故が重なり、二百名以上の犠牲者が出たとされる。生き埋めになり、最近ようやく発掘された遺骨もあるという。

冷ややかな美しさ、静まり返った空気は、この地で行われた

過酷な労働による苦痛が、死後も封じられたことを反映しているのか。十月初旬といっても、本州の人間からすれば、もう晩秋のたたずまいである。しかも、山奥の人造湖であることから、人影はほとんど見られない。

恐ろしい悲劇を秘めているとはいえ、惹きつけて放さない美しさがあるのも事実だ。僕はしばらくここにどまっていたかった。人の感情さえも凍らせる魅力があるのだ。また、人工のものがこれほど自然と調和しているというのも、一つの驚異だからである。

アオサギが一羽、湖面を滑っていった。対岸で小鳥が時折鳴き交わすばかり。彼方を音もなく、遊覧船が動いていく。沈黙という言葉がもつともふさわしい湖である。

かつての面影

朱鞠内湖の周囲を巡ったあと、母子里のクリスタルパークに寄った。雨竜郡幌加内町ほろかないに位置し、非公式ではあるものの、マインス四一・二度の日本最低気温を記録した地区である。水晶をイメージしたモニュメントの前で、記念撮影をすることにした。資料館の中には気温の推移に関するデータが展示され、「日本最寒地域到達証明書」を、有料で発行してもらえる。

いよいよ、友人のお父さんが生まれた家、少年の頃に訪れたまま、遠い記憶にかすんだ家の跡を探す段となった。場所は中川郡智恵文村ちえぶん。現在は名寄市の一部となっている。地名はアイヌ語の「チエプ・ウン・トウ」（魚の沼）に由来する。

家はお祖父さんが亡くなった後、人手に渡って解体されたというので、当時の面影を手がかりにすることはできない。とりあえず、智恵文駅で車を止めたところに、宗谷本線の上りが入線してきた。ディーラーカーが一両。

そう言えば、僕がまだ二十代だった頃、稚内行き列車の中で、たまたま出会った大学生と語り合ったことがある。ふるさとで就職を決めるために戻ってきた彼が、宗谷線の名寄より北は見捨てられていると語っていたが、なるほどと思った。車両を改造したような駅舎で、もとより単線の無人駅である。ここに一日何本のディーゼルカーが止まるんだろう？

北海道の地名の多くはアイヌ語が起源だが、番地を言わずに「線」を用いる。例えば、智恵文一線、二線というように。大

地を大胆に区切って開発していった名残なのだろう。駅前道をまっすぐ進み、天塩川を渡った辺りは、トウモロコシ畑などが広がっている。

お祖父さんの家は、広大な農地の真ん中にあつた。隣家までの距離は、数十メートルもある。昔は農家だったというから、「大草原の小さな家」といった感じだったのか。現在は他人が新しい家を建てている。友人にとつても「ここだった」と言われても、実感が湧かないものだった。

幼い頃の記憶はそれほど遠い存在だったのである。近くには真宗大谷派の智恵光寺がある。赤いトタン屋根に白壁、いかにも開拓地に建てられた寺院といった面持ちである。アイヌ語の音を写したとはいえ、「智恵」という漢字を当てたところなど、

いかにもお寺の名前にぴったりな感じである。友人のお祖父さんとお祖母さんは、今、その境内の墓地に眠っている。

僕も父が亡くなった後、静岡県富士市、かつての富士郡伝法村にあった本家の菩提寺や、幼い頃父に連れられた田子ノ浦の海を見に行ったものだ。自分のルーツをたどりたいという思いは、父を失ったことで湧き上がるから、友人がお祖父さんの家の跡を再訪した思いは、大いに共感できるものだった。

国鉄の分割民営化を境にして、北海道内の鉄道は三分の二が廃止されてしまった。道路が整備されるにつれて、一日数本しか走らない鉄道は、住民から見放されていったのである。そんな赤字ローカル線で、「赤字日本一」を誇った(?)のが美幸

線である。宗谷本線の美深びふかから興浜北線北見枝幸きたみえさし駅までを接続する計画だったが、途中の仁宇布にうぶまで開通したところで、一九八五(昭和六十)年に廃止されてしまった。

ところで、旧美幸線の一部でトロッコを走らせているという情報を耳にした。観光客向けに、廃止路線の一部を復活する動きが、日本各地に広がってきており、鉄道マニアにとってはどうれしい傾向である。

以前、宮崎の旧高千穂鉄道の路線跡を、トロッコで走ったのが忘れられず、今回の北海道旅行でも予定に組み込むことにしたのだ。旧美幸線のトロッコに乗るには、旧仁宇布駅に回る必要がある。智恵文を立った僕と友人は、トロッコ王国美深と名を変えた旧美幸線の終着駅に向かった。

トロッコを走らせている区間は、旧仁宇布駅から、高広の滝までで、そこからUターンして戻ってくるから、往復で十キロあり、一時間は見ておいた方がいい。十分前になったところで、待合室で運転に関する注意事項の説明を受ける。実際に出発したのは午後三時。運転は自動車免許を持っていない人が行うので、友人にやってもらおうことにして、僕はビデオを撮影することにした。

十月の北海道は、本州の人間からすれば、初冬ぐらいの寒さはある。手が凍えるというので軍手は借りていたのだが、ジャンパーを着ていても震えるほどだった。先を走っている男性は、一人でビデオ撮影もしているらしく、アクセルをかけようとなないので、ノロノロと進んでいくしかない。

途中無人の踏切がいくつもあるのだが、廃線のため、車優先となっており、トロッコの方が停止しなければならぬ。橋は欄干がないので、徐行運転する必要がある。

ペンケウニツプ川沿いに敷かれた軌道を、白樺の林や色づいた広葉樹の間を抜けていった。余りの寒さに震えたが、速く進めないし、線路は続くよどこまでも、といった感じである。片道だけで三十分近くかかってしまった。レールの枕木を見ると、かなり腐食している。これでは、スピードを出したくなくなるのも分かる。

折り返し点の高広の滝は、レールが弧を描いているのだが、余りに急なカーブなので、急ぐと脱線してしまいそうである。坂道になっているので、遅すぎると停止してしまう。

帰り道は、前のトロッコが速く進んでくれたおかげで、快適に進むことができたし、風に当たりながら、ビデオを四方に向けて余裕もあった。小雨がぱらついてきたものの、本降りになる前に、出発地点に到着できた。

凍えていたので、駅舎では甘酒を飲んでストーブに当たっていた。旧美幸線のホームに上がったたり、放置された寝台車両の中を覗いたりした。

緑の原野はいずこに

その日は歌登うたのぼりのホテルに泊まった。美幸線が北見枝幸まで開通していたら、そこにも駅が作られたはずである。ちなみに、一九七〇年代には、橋やトンネルを含めて路盤は完成し、線路を引くばかりになっていったというから、鉄道建設を進めていた側にとっては、仁宇布までで廃線にされたことは、無念の一語に尽きるだろうが、経費の面では壮大な無駄遣いをしたことになる。

翌日は朝からとても天気が良かった。午前九時にチェックアウトし、友人の勧めでサロベツ原野に向かうことになった。歌登からはひたすら車で山道を下っていくと、宗谷本線の音威子おといねっ

府駅が見えてきた。地名の由来は、アイヌ語で「濁った川」を意味するという。中川郡の村であり、かつてはここから天北線が浜頓別經由で、稚内まで延びていた。

「音威子府に行ったら、蕎麦を食べるんだよ」

これは友人がおばさんから、口癖のように言われてきた言葉だそう。ここで小休止することにした。人気のまばらなさびしい構内である。

昔はプラットホームに蕎麦屋があつて、乗客も蕎麦が食べられるように、駅にしばらく停車していたとのこと。改札前の駅舎で、老夫婦が出してくれた蕎麦は色が濃く、濃口のだし汁がかけてあつた。寒いので瞬く間に平らげてしまった。

車は天塩川に沿って道を進んだ。若い頃、稚内まで宗谷本線に揺られたことがあつた。二時間経つても天塩川沿いで、全く代わり映えのない風景に退屈したものだ。道路は川の左側、宗谷本線は対岸の右側を走っている。やがて、天塩川は左に折れて日本海に注ぐ。

幌延ビジターセンターに到着したのは、昼下がりのことだつた。彼方には利尻島が見える。あの島の海岸線を、自転車で駆け巡つたのを思い出す。よく見ると、山頂には雪が積もっている。もう冬が訪れていたのだ。いつか機会があれば、利尻山に登りたいものである。

センターの入口で記名した後、湿原の動植物の写真を見る。まだ咲いてる花などあるのだろうか。エゾリスやエゾシカ、キ

タキツネも住んでいるらしい。少し離れた位置にある、鉄骨を組んだ展望台に上った。ここからは、サロベツ原野全体が見下ろせる。何だか秋の装いである。手前にあるのが長沼、その先にはパンケ沼が見えるが、そこまでは歩けそうにない。

この原野はかつて海底だったという。標高はせいぜい二メートルといったところ。もし津波が押し寄せてきたら、展望台にたどり着けるかどうか、生死の境を分けることになる。

展望台を下りると、湿原の木道を歩いていった。以前、友人がここを訪れたのは真夏で、草が青々して花々が咲き乱れていた頃だった。今、すでに初冬の趣となつて、ほとんどが枯れ草、広大なモノトーンである。

笹が繁殖したせいで、この湿原も乾燥化が進んでいるという。

手前に長沼が見えてきたが、渡り鳥はまだ来ていない。季節としては中途半端である。花もなければ鳥の姿もなく、あるのは荒涼とした光景と風の音だけ。

谷地^{やちまなこ}眼^{まなこ}というのは、湿原に出来た泥の深み。牛でも落ちたら、呑み込まれてしまう。深さを測る棹^{さお}が設置してあるので、実際に垂直に潜らせてみると、五メートル以上あった。湿原がかつては海だった証拠で、泥炭が均等には積み重ならなかったことを示している。

木道は途中で歩幅ほどの踏み板に狭まり、枯れ草に埋もれかけていた。行けども行けども風景は変わらない。パンケ沼ははるか彼方である。人が通らなくなった木道は、すでに朽ち始めている。歩くうちに二度も踏み抜きそうになった。危うく足を

くじくところだった。

足元は湿原の沼に沈みつつあった。友人が小走りで渡ろうとしたが、靴の中に水が入ってしまった。もう先に進む気はなくなった。戻ることにしたら、パラパラ降り出した。ふと木道の横を見た。茎が枯れたエゾリンドウが、押し花のように紫の花だけは色を変えずにいた。本降りにならないうちに、何とか幌延ビクターセンターにたどり着いた。

友人の話によると、以前感動したサロベツ原野は、幌延周辺ではなく、豊富とよとみの湿原センター周辺だったのだそうだ。車に乗り込み、海沿いの道を進んで、湿原センターに到着した頃には本降りになっていた。

拍子抜けしたまま、稚内方面に向かって、海沿いの道を走っていた。すでに雨は上がっていた。道からシカが二頭飛び出そうとして、こちらを見ている。しばらく行くと、キツネが前方を横切った。

ノシャップ岬に到着した。アイヌ語のノツ・シヤム（岬が顎のように突き出たところ、または、波の碎ける場所）に由来する。風が強いせいだろう。辺りには低い木と草しか生えていない。

空はすっかり晴れ上がり、礼文島の平べったい稜線に、太陽が没しようとしていた。そそり立つ利尻島は、すでに色を失っていた。空が哀しみを帯びて、赤く燃え上がっていた。人々は立ち止まり、息を呑んで眺めていた。北海道に来て、これほど

美しい太陽を見たのは初めてだった。

稚内の町は狭い平地の背後に、せり出した高い丘が控えている。その上には自衛隊のレーダーが設置され、手前の台地には霊園が広がっている。宗谷本線の沿線には、牧場や草原が広がっているのに、北端に近代的な都市が築かれたのは、ロシアから北海道を防衛するためである。日露戦争から終戦までの間、南樺太が日本領だったので、国境ははるか北に移動していたけれども。ソビエト連邦崩壊後は、稚内からコルサコフ（日本名大泊）までの定期航路が再開している。

その夜は市内のホテルに宿泊した。夕食はかなり豪華だった。蛸たこしやぶは、沸いたお湯にまず野菜やキノコ、ラーメンを入れた後、薄くスライスした蛸を、さっと湯通しして、味噌だれで

いただくものである。海老やホタテの刺身、ニシンの麴こうじ漬けもあった。タラバガニを半分にしたものが、一人一人に付けられていた。

大浴場の浴槽に浸かった。塩化物・炭酸水素塩泉というから、重曹を含んだ温泉である。柔らかな泉質で肌がすべすべになり、適温でのんびりと疲れを癒せた。

どうせ雨だろうと思っていたら、快晴に近いほど晴れ上がっている。チェックアウトして向かった先は、稚内市内の大沼である。アイヌ人は「シユプトウ」、ウグイの沼と呼んでいた。砂州で海と隔てられた海跡湖である。ちなみに、渡島半島の大沼の方は、駒ヶ岳の噴火による堰止湖せきとめこである。

国道四十号線を行くと、展望台で車が止められるようになってくる。ここから下りていくことにした。一眼レフのカメラをいじっている、友人が先に向かつて様子を見てきた。

「下の方に行くと、すぐ眺めがいいところがあるんだ」

階段を下りていくと、大沼の全貌を見渡せる地点まで来た。

緑の草に囲まれ、温かな光に包まれた水面が、無数の光の粒を反射している。稚内はサロベツ原野と比べて、かなり温かいのだろうか。

大沼の北側へ車で下りていき、海側の平地へと出た。岸边には大沼野鳥観察館がある。数ヶ所に望遠鏡が設置されている。

白鳥が来ているのかとつぶやくと、所員のおじさんが、あの望遠鏡で見られると指さしてくれた。

確かに白鳥が二羽、沼のほとりで羽を休めている。ただ、首を胴体につけているので、白い塊にしか見えない。

沼のほとりを歩くことにした。丘で海峡の風が遮られるため、ここはまだ初秋のように、草も青々としている。風がないので、沼の水も太陽の光を満面に浴びている。白鳥が首を上げていたので、すかさず写真に撮影した。

水面ぎりぎりを小鳥が群れをなして飛ぶ。アオサギが羽ばたきながら着水し、湖面で安らいでいる。草原を見ると、ピンクや黄色い花が、まだみずみずしい姿で咲いている。

「以前見たサロベツ原野って、こんな感じだったのかな」

これだけの広さに、人の姿が一つも見られないことが素晴らしい。オフシーズンで平日ということもあるが、海側の空を飛

行機が下りていく。稚内空港にほど近いのである。声問川こえといがわへ続く水門の手前まで行ったところで、野鳥観察館へ引き返した。所員の話によると、今年はまだ渡りの数が少なく、年によっては十月の初旬に二千羽の白鳥がひしめいている。餌付けえつづけをしているということもあるが、対岸にいる鳥は自然に生えた水草を食べているという。

次に向かったのは、宗谷岬だった。ロシア人に択捉島を奪われて以来、北海道最北端の地となった。記念碑の前で写真を撮ったのだが、歌謡曲「宗谷岬」(吉田弘作詞・船村徹作曲)が、右隣の石碑から流れてくる。

「サハリン(樺太)は見えるかなあ」

「稜線のようにも見えるけど、雲かどうか分からないね」と友人が答えた。

宗谷海峡には海底トンネルを掘るという話がある。青函トンネルの場合と比べると、本州と北海道には地質の違いがあり、断層を貫く大工事だったが、北海道とサハリンの間には違いがないから、青函トンネルほどの難工事にはならないという。シベリアとサハリンの間の間宮海峡に、海底トンネルを掘る構想があり、それだけでは費用対効果が小さいので、宗谷海峡にもトンネルを掘って、シベリアと日本を鉄道でつなぐことに、ロシア側は積極的なのだが、日本側は一部の鉄道マニアが議論しているに過ぎない。

「日本とロシアは仲が悪いからね」

北海道生まれの友人も、これには否定的な考えである。やはり、ソビエト連邦が日ソ中立条約を一方的に破棄して、満州の日本兵をシベリアに抑留し、南樺太と千島列島を占領したことに不信感がぬぐいきれないのだ。しかも、スターリンは北海道を二分して、留萌と釧路を結んだ線の北半分まで、併合しようと画策していたのだから。

日本人がロシアに関心を持つのは、文学や音楽などの文化面に限られるのに対し、ロシア人は日本人が思う以上に、日本の経済・文化に関心を持ち、親日的であるのだが。

オホーツク海に沿って、車を南下させていく。かつて天北線が走っていたコースである。向かっているのは浜頓別の町であ

る。稚内からは百キロ近く離れている。薄日が射しているためか、海の面が緑色に見える。風いでも冷やややかで、人を受け付けようとしな

い。「僕が二十代の頃、初めて、オホーツク海を見て、色が違うのに驚いたんだよ」

友人も遠目ながら、非情な色に目を見張った。右折して浜頓別の中心に入る。住宅街が広がっている。天北線の駅がどこにあったか分からない。クツチャロ湖畔に向かった。「クツチャロ」とは、喉元を意味するアイヌ語で、湖沼こしやうの出口を表している。海跡湖であるから、波のない岸辺といった感じで表情に乏しい。渡り鳥の姿もまだなく、原野は枯れ草ばかりである。

ちよつと中途半端なので、ベニヤ原生花園に寄ってみたが、

またもや雨がぱらついてきた。木道で岸まで歩くと、三十分近くかかるだろう。海まで歩くのはあきらめ、展望台からオホーツク海を眺めることにした。ガラス越しではあるが。海面はすでにモノクロで、辺りに人影はない。さびれた感じである。

あとは帰るだけ。峠をひたすら下っていく。名寄辺りから雨の降りが激しくなった。途中、トイレ休憩はしたけれど。旭川のレンタカーの店に、車を返したのは午後七時過ぎ。雨はようやくやんだ。ベンチに腰を下ろす。元の地点に戻ってきてしまったわけだ。初日の夜のことを懐かしんだ。

午後九時半に札幌駅に到着。友人と別れて、僕は一人で薄野すすきののビジネスホテルに泊まった。だが、僕の旅はまだ終わらない。

身の毛もよだつ迫力

朝になった。天気予報を見ると、どうやら雨降りである。一度は訪れたいと思っていた支笏湖しこっこだが、どうしようかと迷った。とりあえず、大通公園に行ってみた。最後に足を運んだのは、僕が二十八歳の時。まだ希望に満ちあふれていた頃で、ちょうどエリツインが、ソビエト共産党と闘っていた時期だったな。テレビ塔の展望台に上ってみた。樽前山の方は霧がかかっている。やはり、雨が降っているのだろうか。下におりると、すでにやんでおり、雲間から日が射してきた。これなら支笏湖に行けそうだ。

新千歳空港駅に到着すると、支笏湖行きのバスに乗り換える。

千歳市街を抜けると、どこまでも直線の道が続く。山道をダラダラ上っていく。多少カーブしても、ひたすら直線の道を進む。札幌からだときつい山道を越えるのだが。「高校の頃、その道を支笏湖まで歩かされたんだよ」と、友人がぼやいていたのを思い出した。

いきなり、バスは谷底に下っていく。どこまでも地の底へ落ちていくみたいに。終点に到着したが、支笏湖の湖面は見えない。さらに徒歩で下りていく。

山体を吹き飛ばした巨大なカルデラには、溢れんばかりの湖水が満ちている。海の潮目のように、手前が青、沖が緑に染まり、長々と湖面に線が引かれている。しかも、うねりが高く、岸に近づいた波は、荒海のように岸壁を打ち、鈍いうなりを上

げて飛沫を上げる。

三六三メートルの深さを誇る湖は、底が海面下にまで達し、琵琶湖に次ぐ水量を誇る。それほど水を抱え込んでいるため、波が立つたびに、たふんたふんと深みから音がする。人を寄せつけようとせず、迂闊うかつに近づく者を湖底に引きずり込み、二度と地上に戻さないかのように。

この湖の主は深みに姿を隠している。分身である風不死岳ふうふしだけと樽前山は、黒雲を山上にいただきながら、湖面全体に睨みをきかす。アイヌの神話でも、この湖には怪魚が住んでいて、地震を起こしたり、刃向かう者を湖底に引きずり込んだという。

今までこれほど恐ろしい湖を見たことがない。支笏湖、アイヌ語のシコットーシコットー(大きな窪地の川の湖)が語源だが、日本語に

なつた途端、死骨という陰惨なイメージをまとうようになった。その点では、アイヌ語のウシヨロ（入江）が、下北半島の恐山の語源であり、死者が集まる霊場となつた経緯と似ている。生贄いけにえとなつた者の骨を水底に溜め込むかのように、湖底には流木が水草にからまつているという。

雨が降ってきた。レストランで遅い昼食をとつた。その間に、通り雨は過ぎていった。ビジターセンターを見学する。支笏湖の成り立ちに目を見張つた。カルデラが形成された三万二千年前、火砕流が札幌を襲つて日本海に達したこと。円形のカルデラに風不死岳、次いで樽前山が生まれ、現在のいびつな円形の湖になつたことなど。湖畔に生息する野鳥や動物、熊やウサギ、

リスなどが、写真や剝製で展示、説明されている。アイヌのおばさんの店に寄り、ムックリ（口琴）を目にする。懐かしくなつて買った。

岸辺を歩くことにする。雲間から日が差してきた。湖の怒りは解けたようだが、広大な水面みなもは底知れぬ力をたたえている。山線やませんの鉄橋のたもとに立つた。旧王子軽便鉄道が、苫小牧工場から湖畔まで引かれ、資材以外に観光客も運んだことを知つた。廃止されたのは一九五一（昭和二十六）年だという。

レールが外された鉄橋は、今は観光客の遊歩道の一部となっている。湖水に触れられる所まで来た。緑がかつた北の海を思わせる湖水に、恐る恐る手を伸ばす。冷たい。冷蔵庫で冷やした水のようにだ。こんな湖に落とされたら、たちまち心臓が止ま

ってしまふ。やがて日は暮れてゆき、ようやく湖も眠りの時を迎えた。

晴れ上がった空に闇が迫りつつあった。波も静まって、昼間の恐ろしい風貌も影を潜め、威厳に満ちた余裕を湛えている。藍色に変わった水面と、燠火おきびに似た残照のコントラストが美しかった。

厳冬の寒さが追ってきた。風邪を引いてしまいそうだった。売店に駆け込むと芋餅を食べ、コーヒー牛乳を温めてもらった。精気を養ったところで、見納めにもう一度、湖畔まで下りていった。

湖は夢うつつにまどろんでいた。だが、闇に覆われながらも、水底の主が目を閉ざすことはないだろう。黒い水面は息をして

いる。夜明けを待っているのだ。支笏湖の迫力に圧倒されたのは、旅の締めくくりとしてふさわしかった。

階段を上ってバス停に出ると、すでに電灯がともっていた。待合室で寒さをしのいでいる人もいる。新千歳空港行きのバスに乗り込んだ。飛行機を待つ間、携帯電話をチェックすると、友人からメールが来ていた。

「支笏湖に行けたんだね。もうすぐ北海道から内地に行くんだね。今回の旅は非日常的で思い出になりました」

一日だけの一人旅だったが、途中で別れた彼の言葉を聞くと、ちよっぴり心が和なごんだ。午後八時発の東京行き日航機に乗り込む。第四回目の北海道旅行は終わった。

阿寒湖畔に日は落ちて

北海道を旅するのは五回目である。前は二〇一四年だから三年ぶり。では、今回の旅の目的は？と問われたら、若き日に訪れた地の再訪と答えよう。同じ場所を繰り返し訪れても、初めての時の感動はないと言われそうだが、三十年余りの歳月を経ての再訪なら、これはわけが違ってくる。

お盆明けの八月中旬、友人と羽田空港を飛び立った。窓の外は雲海が広がっていたが、風は強くかなり揺れた。到着三十分前には、襟裳岬えりもみさきが見えてきた。高度が下がっていたので、波打ち際の様子まで見える。あれが釧路の街だなと思ったら、低空で通過してしまう。空港は釧路湿原の方にあるのだ。

午後二時半前に着陸。到着ロビーに出た途端、余りの寒さにくしゃみが出た。とても真夏の気候とは思えない。北海道の中でも道東は気温が低く、八月でも二十度を切る日がある。原因は寒流が流れる上を渡った風が、雲や霧となって太陽光線を遮るからである。

レンタカーの会社の車に乗り込み、向かいの営業所へ送ってもらう。数台の車を紹介され、グレーの最新式を借りる。

「釧路湿原で一番近い場所はどこですか」

教えてもらった地点をナビに入力。あとはアナウンスに従っていくだけ。若い頃のドライブとは大違いだ。すぐに出発！天候はまずまず、雲は多いが日が射してくる。

釧路市湿原展望台は、道道五三号線沿いにある。西洋風の城

をイメージした茶色い建物。入館は有料で五百円ほどかかる。ここからは、壁と林で視界が遮られている。中には「水の大地」釧路湿原を再現したジオラマや、ライブ映像も見られるようだが。ガラス越しではなく、肉眼で観察したいと思っっているなら、サテライト展望台というのが遊歩道の先にあるらしい。広葉樹の林の中をしばらく歩いていったが、視界はなかなか開けてこない。

ようやく展望台に到着した。以前に釧路湿原を訪れたのは、二十年ほど前のことである。どうも記憶していたイメージとは異なる。それもそのはずで、細岡展望台とは反対方向から、湿原を見ているからだった。ここからだ、と、視界は開けていても、地平線も川の流れも見えない。しかも、南側には釧路市街の住

宅地や煙突が見える。ちよつと絵にならない感じだ。

写真とビデオで撮影。元来た道を戻らずに、順路を一周することにした。谷に下りていき、つり橋を渡り、山道を上って元の場所にたどり着いた。登山しているように汗ばんでいる。元の茶色い建物が見えてきた。レンタカーに乗り込んで、あとは阿寒湖を目指してひた走りする……。

阿寒湖はカルデラに出来た堰止湖だという。南東側から阿寒川が流れ出している。そのあたりは箱根カルデラに出来た芦ノ湖とよく似ている。毬藻まりもの生息地として有名である。湖岸近くまで原生林が茂り、道路が接しているのは、南側の阿寒湖温泉だけ。遊覧船に乗らなければ、湖の全貌をうかがうことは難し

い。

ニュー阿寒ホテルシャングリラに到着した。チェックインして客室に荷物を置いた後、阿寒湖の湖畔を散策することにした。ちようど日暮れ時だった。山影に日が沈むと、空はゆつくり色あせていく。その時、遊覧船が船着き場に近づいてきた。紫色を帯びた湖水が、ゆらゆらとさざ波を寄せてきた。岸でちやぷちやぷ戯れている。他の音は消えてしまった。シャッターを切る。詩情を醸し出す風景だった。

夕食はバイキングだった。寿司や蟹の他、スペアリブなど多数の肉料理があった。部屋に戻ると、阿寒湖の湖上に船が浮かべられ、お盆の送り火を載せた灯籠流しが行われていた。赤い光の点が無数広がり、黒い湖面をほのかな光で彩っている。

さて、午後十時を回ったところで、屋上にある露天風呂に向かった。海水パンツをはいて外に出ると、夏といっても北海道の夜は寒い。上に出た途端、目を見張った。屋上の端まで、厚いガラス張りのプールとなっており、ぬるめの湯が張ってあったからである。

阿寒湖の湖面はすでに闇の中に沈んでいた。雲が多いせいか、星は余り見えなかったが。その代わり、向かいのパネルに光の祭典のような映像が現れ、ロマンチックな音楽が流れていた。浴槽の中は薄暗いので、互いの顔もぼんやりしか見え、人々の歓声やささやきが響く。何とも幻想的な空間だった。

カップルや友人と肩を並べて、暗い湖面を見下ろすのもよし、水面を照らす光の戯れの中で、手を握り合うのもよし、童心に

返って皆はしゃいでいる。このホテル最高のもてなしだった。

サロマ湖は変われど

翌朝は雲が多かった。阿寒湖はろくに見ていないのに、友人の望むままにオンネトーに向かっていた。アイヌ語で「大きい沼」を意味するのだという。何だか聞いたことある地名だと思っただが、オンネトーは根室半島の付け根に同名の塩水湖もあり、温根沼という漢字が当てられている。

今回向かったのは、足寄町あしよろにあるオンネトーで、時間によって水面の色が変わることから「五色沼ごしきぬま」とも呼ばれる。ただし、「五色沼」は裏磐梯うらばんたいにもあるから、地名の重複ちゆうかくを避けるのは容易ではない。雌阿寒岳めあかんだけの噴火による堰止湖で、サンショウウオやザリガニが生息している淡水湖である。

オンネトーの水は緑がかった。これは雲が多いからだろうか。雲が切れるにつれて、岸辺の葦が照り映えてきた。ただ、雌阿寒岳は雲がかかり、山頂が見え隠れしている。ふたたび車に乗り込むと、岸に沿って進んでいく。南の端には国設野営場、キャンプ場があった。

その辺りは水深が浅く、水底は土の色を映して、茶色から黄色、緑色へとグラデーションを作っている。セミが鳴いているのだが、本土のものと比べると妙に甲高い。エゾゼミというらしい。

オンネトーをあとにした。今回の北海道旅行は、大学生の頃に訪れた土地を、五十過ぎとなって再訪しようというもので、

サロマ湖は二十一の時から目にしていない。一体どんな感慨を抱くだろうか。

目的地はサロマ湖畔のワツカ原生花園。サロマ湖とオホーツク海を仕切る砂州にある。カーナビで検索すると、午後四時過ぎに到着と出た。ただし、実際にはそんなに時間はかからないだろう。道がすいているし、ほとんど信号がないからだ。

しばらく進んでいくと、道の駅が見えてきた。かつての北見相生駅きたみあいおいである。国鉄が分割民営化されて以来、北海道の鉄道は三分の二が廃止されてしまったが、僕らが学生の頃には、まだ鉄道網が存続していたのだ。そこは石北本線の美幌駅びほろから延びていた相生線あいおいせんの終着駅だった。今はレールと車両を残す鉄道公園に変わっていた。客車はライダーハウスとなっており、

一般の入場はお断りとあった。

能取湖のとりこが見える。遠浅の岸边はなだらかなカーブを描いている。サンゴソウはまだ赤らんでいなかったが。記憶がよみがえってきた。二十一歳大学三年だった僕は、初めての北海道旅行で、網走から湧網線ゆうもうせんのディーゼルカーに乗って、今日にしていう風景を見たのだった。紅くれないに染まったサンゴソウ。聞いていた通りだ……。思い出したというだけではない。かつて目を見張った時の感動まで、よみがえってきたのだ。青年だった頃の自分が、心の中にまだ生きていた。

時計を見ると、午後二時過ぎである。湖岸にある食堂に入ると、広い店をお婆さんが一人で切り盛りしていた。地元の人が

懇親会こんしんかいを開いていた。僕と友人は、帆立貝入りのカレーを食べた。店の壁には、湖岸を走っていた湧網線の蒸気機関車とディーゼルカーの写真が飾ってあった。かつての線路跡は、今ではサイクリングロードとなっている。車窓で眺めたのと同じ風景を、ペダルを踏みながら楽しめるといこうわけだ。

オホーツク海が近づいてきた。常呂川ところがわを渡っている。海側にはかつて湧網線が走っていたはずだ。恐らく坂の上辺りに常呂駅があったのだろう。人気のないさびれた無人駅で、低いホームに人影が現れるのは、ディーゼルカーがゆっくり入線してくるときぐらい。廃止された現在の方が、よほど開発が進んでいる。あの孤独なランナーの休息所が、バスターミナルに姿を変えてしまったとは信じたくない。

栄浦大橋を渡ると、ワツカ原生花園に到着した。ワツカとはアイヌ語で水を意味する。ネイチャーセンターに駐車したのだが、大学生の頃の記憶と一致しない。あの時は栄浦までバスで出たのだが、湖の東側から出てく回っていった気がする。頭が整理されないまま、ネイチャーセンターで自転車を借りることにした。午後三時過ぎだった。五時半までに戻るように言われた。

友人と走っていくと、後ろから馬車が走ってきた。のどかな感じがして、ハマナスの咲く草原としっくり合う。しばらく進むと、T字路に出た。どうやら馬車はここで引き返すらしい。左に曲がっていくことにした。

オホーツク海もサロマ湖も見えない、砂洲の中央を走っているからだろう。空は快晴になっていた。海は青いが緑がかっている。かつての記憶と、目に映る光景が噛み合わない。あの日は海も冷たい緑色だったし、オホーツク海にたどり着いてから、ヒッチハイクもしてしまった。歩道をちよつと広くした道路を、軽トラックが通過していった。あんなのに乗せてもらったんだな。竜宮街道という名で思い出した……。

ようやく合点がいった。当時は栄浦大橋がなかったのだ。竣工したのは昭和六十三年だから、前回訪れた四年後ということになる。ワツカネイチャーセンターもなかったはずだ。やはり三十年余の歳月の隔たりは大きい。

自転車でも二キロも進むと、湿原の彼方にコンクリートの橋が見えてきたが、あんな丈たけの高い無機質な物はなかった。風景に合っておらず、何だか浮き上がってしまっている。あの日の僕は、名古屋大学のカッブルと一緒に、営林署のおじさんから、オホーツク海でのホタテ貝養殖や、次々に押し寄せる流水について教えてもらったのだった。

橋をもっと低かったはずだ。湖口に流れ込む海水が、貼り付けられた鉄板をはたはたと叩たたいていた。水面はすぐそこに見えていたのに、今でははるか見下ろす形みおろになっている。

橋を渡って、植林した林の脇を進んでいくと、ついに行き止まりとなった。砂州を縦断じゅうだんすることは想定されていない。群生する杉はかつて見た時よりも高く、鬱蒼と光を遮っている。

昼なお暗い先にはオホーツク海があるのに、波音すら聞こえてこない。

行き止まりの手前に、湧き水が出る箇所があった。ワツカというアイヌ語は、飲める水を意味している。砂州だと塩水しか得られそうにないのに。水飲み場にはキツネが出てきた。人を恐れる様子はない。動きはすばしっこいから、ビデオで追っかけてるうちに見失った。人工の林もすっかり風景の一部となっている。棲すみついた最初のキツネは、この砂州をてくてく歩いてきたのだろう。かつての僕のように。

日はすでに傾かたむいていた。もう戻らなければならぬ。自転車にまたがったまま、橋の上から、オホーツク海とサロマ湖を仕切る砂州を見下ろした。湖面は光を受けて輝きらいている。海は風

いで遠方がかすんでいる。三十年前とは変わってしまった。ここにはまだ野生の大地が残っていた。原生花園には白い花、黄色い花、赤いハマナスの花と実もあった。視界が大きく広がって、とらわれない開放感があった。大学生の頃の自分には戻れなかったが、かつて足を運んだ地に立つ実感はあった。

空には月はなかった。月を見て、地球と見紛うこともなかった。あの日よりも温暖だし、海も緑がかっていない。横には友人もいて、孤独でもない。ただ記憶の中では、かつての自分が生きていた。

そのとき、砂浜に不思議な物を見つけた。もちろん、幻覚ではない。枝を円錐状に支え合わせて、テントの骨のように組んであった。燃え上がる炎を、イメージしているのだろうか。動きを止めた火は、海岸に作られたオブジェに見える。作った人間はいなくても、意思が形を取った存在だった。

時間に余裕があるので、T字路の箇所を越えて走っていく。そのとき、かつての記憶がつぶさによみがえった。ああ、この風景だ。あの日より晴れているが、日も西に傾いているが、確かにこの風景だ。坂道を下っていく。かつてはここを反対に上って、初めてオホーツク海を目にしたのだった。そこには緑があった、冷たい北の海があった……。

もう戻らなければならない。日が傾いた中を、必死に自転車をこいでいく。ネイチャーセンターに着いたのは、五時半少し過ぎだった。車に乗り込むと、僕は一方的にしゃべり続けた。

友人は圧倒されている様子だった。過去と現在を照合する独り言に。

知床は記憶の果てに

サロマ湖との再会を果たした僕は、その夜、網走湖畔のホテルに泊まった。窓の向こうに広がる湖は、対岸まで緑色によんでいる。動きのない動画を見せられているような。阿寒湖がどれほど美しかったか、改めて感じさせられた。朝風呂を浴びて朝食をとると、急いで車に乗り込んだ。

いよいよ、知床に向かつて出発！ 網走市内はすぐに通過し、釧網本線に沿っていく。友人の話では、北海道では列車を汽車と呼ぶんだそうだ。電化されていない路線が多いからだろう。おしゃべりするうちに、小清水の原生花園に寄りたいた言われた。

本当は早く知床に向かいたかったのだが。駐車場を下り立つと、すぐ脇に原生花園駅があった。こぢんまりとした可愛い駅だ。そのとき、過去の記憶がよみがえった。deja vu、^{デジャヴュ}既視感があったのだ。三十三歳の時、知床を二度目に訪れたとき、女満別空港発ウトロ行きのバスは、乗客が僕しかいなかった。運転手がとても気さくな人だったので、勧められるままに下車し、目の前の風景を写真に収めたのだった。踏切があったのも、目の前に瀟漓湖^{しょうふつこ}が広がっていたのも思い出した。

駅前からは視界を遮る物は何もない。彼方の対岸まで、湖岸に広がる原野を一望できるからだ。柔らかな日射しが水の色も、草花の色も鮮やかにしている。標高の低く細長い地形は、サロマ湖で見たものと似ている。湖が汽水であること、海から湖を

仕切るのが砂州である点でも同じだ。唯一の違いと言えば、国道と鉄道が砂州を縦断している点だろう。

今回は原生花園の丘の上に立ち、オホーツク海の方も見下ろした。ここはワツカ原生花園よりも花が咲いている。黄色や白、赤いハマナスに混じって、^{だいたいいろ}橙色の百合^{ゆり}なども咲いている。花の間を蝶が舞っていた。植林などされておらず、開放感が味わえるはずだ。

ちなみに、原生花園駅は臨時駅で、ゴールデンウィークから十月末までしか止まらない。北海道の冬は長い。周辺には民家がないため、観光客が来なければ、乗降する客もいないのだ。無人駅ではあるが、今日は保線員が大勢来ていた。一年の大半は広大な湿地帯といった感じだが、花の美しい期間だけが、人

々のにぎわいが見られる。行く手の斜里岳は、山頂だけが雲をかぶっていた。

知床の玄関口は知床斜里しれとこしやり駅だが、レンタカーなので通過した。いよいよ知床が近づいてくる。北海道の中で最もワイルドな自然が残っていて、それを目当てに若者が集まってくる。僕の青春の思い出が詰まっている地だ。とりわけ心をとらえたが、雄壮な姿の滝だった。その一つが、知床の中心ウトロに入る前にあった。オシンコシンの滝である。

三十三歳の時の旅では、「知床夕陽のあたる家」ユースホテルで知り合った文学青年と、滝の下まで上っていったはずだ。道路脇からでは、滝の一部を左方からしか眺めることができない。

いので。行き当たりばつたりの僕とは大違いで、下調べをよくしていた。

車を止めて階段を上っていく。轟とどろく音はもう聞こえる。三分ほどで、滝の全貌が眺められる地点に着いた。流れ落ちる水は大きな岩に遮られ、三方に分かれるのだが、真ん中の勢いが最も強く、岩を滑り落ちる間に、右手の流れを凌駕りようがしていく。水しぶきがここまで飛んでくる。左手の流れは水量は少ないものの、網のように広がっていき、苔むした岩の美しさを際立たせる。型破りなところが、また魅力なのである。

トンネルをくぐるとウトロの町が見えてきた。初めて訪れたのが二十八歳の時、二度目が三十三歳の時で、それから二十年

ほどの歳月が流れていた。駐車場に下り立った僕は、啞然あぜんとしてしまった。記憶の中のウトロと、すっかり変わってしまったからだ。

これは知床が世界遺産に指定され、国内外から観光客が押し寄せるようになったことと無関係ではない。僕の知っているウトロは、知床を旅する拠点の町だったとはいえ、どこか辺境らしい荒涼とした雰囲気なまが漂っていた。

ところが、ウトロのシンボルだったオロンコ岩も、二階建ての立体駐車場やみやげ屋、世界遺産の案内所なかに半ば隠れてしまい、岩の全貌を拝むことができない。観光地化されてしまい、この町が持っていたすがすがしい空気が、失われていたのだから。

コンビニでお握りを買ひ、車内で食べた後、知床自然センターの駐車場まで行くことになった。友人の話では、カムイワツカの滝までの乗車券は、そこで買うことになるからということだった。行く手の道を見ると、ものすごい急坂が続いている。二十八歳の時、知床五湖まで自転車で行ったことを話すと、友人は信じられないという顔をした。若かったから、平気で無茶をやったのだった。たしかに、ウトロからの上り坂は、登山道にしか見えなかったから。

知床自然センターで駐車した。そこからはシャトルバスに乗り換えることになる。その前にコケモモのソフトクリームを食べようと、友人を誘った。以前、知床五湖で口にしたのを思い出したからだ。血のような色をしていて、ハスカップよりも酸

味があり、さわやかな香りがする。ちなみに、ハスカップで作る「よいとまけ」というお菓子は、とまこまい苦小牧の名産である。

どうしようか迷ったが、最初にカムイワツカ湯の滝まで、バスで行ってしまうことにした。時間が押していたし、席がすいていたので。発車した途端、アナウンスが入った。カムイワツカの滝は四段になっているが、落石のために一ノ滝までしか行けないというのだ。

青天の霹靂へきれきという奴だった。湯の川を四ノ滝まで登って、滝壺にたまった温泉に浸かる醍醐味は、もはや味わえないというのか。三十三歳の時、文学青年に誘われて、四ノ滝まで登ったときのことを思い出した。滑りやすく傾斜のきつい川底は、裸足はだしでは危険だし、サンダルでは脱げてしまう。上に行くほど水温

は上がっていき、滝を越えるときにはほとんど四つん這いだつた……。

滝登りのワイルド感や、湯に浸かる人々の交歓こうかんも、過去のものとなってしまったわけか。カムイワツカの滝の魅力がなくなってしまう。一ノ滝までだったら、奥多摩おくたまあたりの滝と大して変わらない。

知床五湖は後回しにして、終点のカムイワツカ湯の滝でバスを下りた。僕が初めて知床を訪れた一九九一年(平成三)当時、バスはさらに先の知床大橋まで延びており、しかも自家用車もバイクも自由に入りにしていた。ただ、二度目の一九九六年(平成八)には、落石の危険があるとして、知床大橋への通行は禁

止されてしまった。

さらに、現在では知床五湖より先は、シャトルバスへの乗車を求められているわけで、世界遺産指定による観光客の増加を見越して、安全最優先の措置が執られた結果らしい。訪れているのは中高年と家族連ればかりで、かつてあふれるほどいた大学生の姿が、まばらにしか見られなかった。

カムイワツカの滝を登ることが、ほぼ不可能になったのが大きいのではないか。若者の冒険心をくすぐる湯の滝上流への立ち入りが禁止され、知床の大自然を肉体で感じる機会を奪われたことが、魅力をそいでしまったとしか思えない。

ユースホステルの激減も、一つには少子化の影響や相部屋を嫌う内向的傾向が大きいのだろうが、今の若者は学費のために

アルバイトに追われ、ブラックバイトで長い休みも取らせてもらえないという。知床で青春の思い出を作ること、今の大学生には贅沢ぜいたくになってしまっているようだ。

シヨックだったのは、滝登りできなくなったことだけではない。知床大橋の方面も通行止のまま、カムイワツカ展望台までも行くことができなかつたことだ。かつて歩いた道も立ち入り禁止となっていた。知床硫黄山の登山口も、その先にあるので、登山を希望する者は自己責任で申請してから、立ち入り禁止区域に入ることになる。

たしかに、空の色も滝の入口も、当時のままだったけれども、入れないところばかりで、記憶をたどることができない。世界遺産になったせいで、安全性が重視されるあまり、あれもだめ、

これもだめとなり、自然を外側から見るとなくなつたというわけだ。

万一事故が起きても、昔の人間だったら、運が悪かつたと諦めるだけだったが、外国人観光客が増え、もし安全管理に問題があると、億単位の損害賠償を請求されたため、事前に行動に制限をかけてしまったのだろう。

やせこけた子ギツネが、物ほしげな顔をして、砂利道を通り過ぎていった。餌付けされたギツネは、車に近づくことで轢かれてしまう。ギツネに触るだけでも、エキノコックス症に感染する恐れがある。哀れな感じがしても、座視しているしかなかつた。

バスに乗って知床五湖に戻った。以前とは違って、ビデオと係員によるセミナーを受けてから、五湖を回るようになっていた。これも世界遺産になって、観光客が増えたことへの対策だろう。まず、熊と出会わないことを第一に考え、手を叩いたり、話をしながら進み、熊と出くわすような事態は避ける。食べ物を持ち込まず、やむを得ない場合は、匂いの漏れない袋に密閉する。

熊と出会ってしまったら、静かに退散し、騒いだり駆けたりして、熊を興奮させてはいけない。熊は威嚇のために襲いかかり、すぐに引き下がるはずだが、続けて襲ってくる場合には、首の後ろの急所を手で押さえたり、熊撃退用のスプレーを使うなどの方法があるとのこと。

セミナーには十五分以上かかってしまった。一湖から五湖まで回るのに、徒歩で一時間半かかるといふのに。最終バスの時間を考えると、あと五十分しか残っていない。車は知床五湖の駐車場にも止められたのだが、カムイワツカ湯の滝行きの切符は、知床自然センターでなければ買えなかった。どう考えても、時間に余裕がなければ、見て回れないようになっていたのだ。

一湖のみなら、半分程度の時間で歩けるのだが。それでも、五湖全部回らなかった。僕は諦めるといふのが好きではない。これほど晴れ上がった天気には、知床で巡り会ったこともなかったし。急いで写真や動画を撮って、一周しようということになった。熊を避けるために大声で話しながら。

屋外おくがいに出た。見上げると、上空は青く澄み渡って、雲はわずかしか見えない。かつて二度訪れたわけだが、いずれも山は雲に隠れ、湖水も木々の緑を映すばかりでよんでいた。絵葉書で目にする風景など、作り物じゃないかと思っていたのだが。五湖の前に立つと……、あまりの美しさに声を失った。

水面に映った知床連山は、鏡を見るようにくつきり浮かび上がっていた。湖岸の樹木も枝から葉の一枚まで映えている。雪のない季節だが、ちょうど連山の上にかかった白い雲が雪のようで、色彩から見ても完璧かんぺきな美しさだった。青い湖水に映った像は、本物の空よりも青く、木々の輪郭を際立たせていた。しかも、ほとんど沈黙の世界。カラスさえも周りに配慮して、大人しく羽を休めていた。

五湖の眺めは素晴らしかった。それから四湖、三湖と左回りで巡っていく。三湖のゆったりした湖面もよかったが、五湖の完璧な美しさにはかなわなかった。木々の枝が伸びて、知床連山の全貌を眺めることができなかつたから。

友人が慌てだした。このままじゃ最終バスに間に合わない。写真もそこそこに駆けだした。でも、鏡のような風景を撮影しないではいられない。大ききで言えば、二湖の方が奥行きもあるし、青い湖面に浮かぶ水草も鮮やかだ。五湖のこぢんまりとした完璧さより、連山を背景にした水の広がり、魂の安らぎを感じるかもしれない。

シャッターを切ると、もう友人の姿はない。全速力で走るしかないようだ。ようやく木橋が見えてきた。これも以前来たときにはなかった。熊が出てきても、橋の上からなら襲われる恐れはない。足腰に自信がない老人や、ハードスケジュールで連れ回される団体客には、手軽に一湖のみが眺められるわけだが、五湖の美しさに堪能たんのうしたかったら、やはりすべての湖を見て回る必要がある。

友人に追いついたときには、もう心臓がバクバクして限界に達していた。彼だけがバスに乗り、知床自然センターに戻って、知床五湖まで車で迎えに来てくれるというのだ。それならお任せすることにした。ゆっくり動画でも撮ることにした。

時計を見ると、まだ三分ほど残っている。林の向こうにはバスの姿もあった。もしかすると間に合うかもしれない。ひた走りして乗り込むと、後ろの席に友人が座っていて、手を振ってい

る。その時、バスは発車した。

ウトロに戻ると、港の方へのつぼビルが建っていた。知床ノールホテルである。チェックインするとき、受付にいた若い男女を見て、モンゴル人だと分かった。僕は本職が日本語教師だから、言葉の意味は分からなくても、音の響きから見当がついてしまうのだ。外国人が経営するホテルだとは聞いていたが、ふるさとのモンゴルに似た、北海道の自然に魅せられたのだらう。

シンブルで無駄がない感じがしたが、簡素ながらも奇抜なデザインが施ほどこされている。白と青を基調とした現代アート風のデザインだ。まるで美術館にいるかのように感じた。とにかく

新しく清潔な気がした。スタッフを見ると、モンゴル人以外にベトナム人も採用しているようだ。モンゴルの馬頭琴ばとうきんの音楽がかかっている、レストランのテーブルには、岩塩で作られた口ウソク立てが並んでいる。

四階の部屋に入った。ちょうど日没の時間である。もし最終バスに乗れなかったら、オホーツク海の夕陽を眺めることはできなかつたろう。赤く大きく悲しげな光を放っている。この高さからだ、オロンコ岩の下を隠していた建物も目立たず、かつてのウトロの雰囲気かきもを醸しだしている。

海面近くに雲があるため、赤い太陽は雲の中に沈んでいく。知床でも夕陽が見られるのは、北西のウトロ側である。ゆつくりと日が落ち、夜が訪れると、ウトロの町も眠りについてしま

う。午後十時過ぎでも深夜のように、人影も乏しく車も走行しない。

時を止める湖面

東京では豪雨が降ってるらしい。北海道に来てから、初めて雲の多い朝を迎えた。知床五湖の鏡のような湖面が、木々や連山、青い空を映しているさまも、今日は拝めないのかもしれない。昨日は本当に運が良かったのだ。

モンゴル人が経営するホテルをチェックアウトして、レンタカーは南に向かって走り出した。どんどん雲が切れて、天気が良くなってきた。釧網本線に沿って進んでいく。川湯方面に向かって峠を越えたところで、遠くに岩肌がむき出して噴煙を上げる火山が見えてきた。硫黄山、アイヌ名アトサヌプリ（裸の山）である。なるほど、木も草も生えていない。裂けた山腹か

ら硫黄とガスを噴き出している。

摩周湖に向かう途中で右折して、硫黄山に寄ることにした。屈斜路カルデラは四万年前の巨大噴火の後、この硫黄山と摩周火山を生み出したという。屈斜路湖を含めて外輪山の内側は、かつての火口だったわけだ。規模としては阿蘇カルデラをしのごう日本最大である。

川湯温泉からバスで摩周湖に行く場合、硫黄山を経由するようになっているが、現在では本数が極端に減っている。それは摩周湖へ行くバスも同じで、摩周第三展望台で下りて、次のバスで第一展望台に移動なんているのも難しくなっている。

硫黄山の駐車場に友人は車を止めた。僕はこれで三度目になる。初めて来たのは、二十一歳の時だった。サークルの仲間

教えられて、移動車で販売していたソフトクリームを食べた。二度目は三十三歳の時で、開業したレストランで売っていた。今回もまた、乳脂肪分たっぷりのソフトクリームを食べた。

レストランの裏側では、崩れかけた山体のあちこちから、硫化水素が噴き出している。卵の腐った匂いが漂っている。噴き出すガスで、ところどころ霞かすみがかかっている。平野の真ん中に、何でこんな荒涼とした山が、と思ってしまうそうだが、ここはカルデラの内側である。火口の底を歩いているというわけだ。地下深くには遠い未来に巨大噴火を起こすマグマが、今も眠っているのだ。辺りに響く轟音ごうおんは、魔物のいびきを聞いているようなものだ。

いよいよ摩周火山を登っていく。急カーブの整備された道路は、通る車もまばらである。火山の上から三分の一が吹き飛んで、そこに水がたまつて摩周湖が生まれたという。山腹からいきなり湖水が見えると記憶していたから、登りきる直前からビデオ撮影を始めたのだが、結局、車からは湖水は見えなかった。

駐車場に車を止めた。硫黄山や屈斜路湖が遠方に見渡せる。ここからの眺めも素晴らしいのだが、木の階段を登っていくと、摩周湖が姿を現した。湖面ははるか下方にある。崖の上から見下ろすといった感じである。これで三度目なのだが、今回も雲一つ、霞もかかっていない。水深が深く、流れ込む川も流れ出す川もないため、水面はほとんど波立たず、空の青をより深くした摩周ブルーである。絶壁に近い火口に、しがみつくように

高原植物や、白樺などが生えている。対岸に見える急峻な山が摩周岳、アイヌ語ではカムイヌプリ、神の山という意味である。大きく口を開けた火口は、ここからはわずかしか見えないが、茶色い無気味な喉のようである。

これほど深い青をたたえる湖は、日本にはほかにない。内側を覆う草木と、無機質なカムイヌプリのコントラスト、中央に浮かぶ小島、カムイッシュは緑で覆われているが、湖底からそびえる火山の頂^{いただき}である。この組み合わせが、摩周湖のブルーをさらに際立たせているのだ。

それにしても、この湖の印象はほとんど変わらない。ただ、ああと声を洩^もらしたきり、言葉を失ってしまうのだ。言葉を吸い込んでしまうのだろうか。言葉だけじゃない。時すら止めて

しまう力がある。二十一歳の時に覚えた感動を、初老の年になってもしてるのだから。時間なんてものは、古代インド人が考えたように、自我が抱く幻なのかもしれない。あの時の僕と今の僕は、内面ではほとんど変わっていない……。

人が周りにいなければ、鳥の声、虫の声さえ聞こえる沈黙が支配する。白樺に留まったカラスさえ、辺りの静寂に耳を傾けている。眺めていても飽きることがない。ハイビジョンの4K画面を見ているように、色そのものが快樂なのだから。

唯一の悩みは、飛んでくる虫だ。季節にもよるのだろうが、羽蟻の数が半端じゃない。払っても払っても飛んでくる。そして、動画を映している腕や顔に留まる。カメラが手ぶれを起すから、じっと耐えているしかない。

しばらくすると、薄雲が上空に現れた。湖面は幾分白んできて、感動させる青さは薄れる。摩周湖は霧や雲に閉ざされることが多く、くつきり湖面を仰ぐことができるのは運がいい。ただ、摩周ブルーを目にした人は婚期が遅れるというジンクスがある。三度訪れて三度ともくつきり湖面を拝めた自分は、やはり結婚とは縁がない人間だった。

第一展望台に移った。坂道をかなり下ったので、さわやかな空気ではなく、少々暑くなった。標高が低くなったばかりでなく、売店には観光客があふれているから、騒がしくて湖面に漂う雰囲気を感じられない。カムイヌプリやカムイッシュを真横から見ることになるため、構図としても面白くない。第三展望

台に売店が作られなかったのは、偶然ではなく神の采配さいはいである。

このまま弟子屈てしかがに出してしまうのかと思つたら、友人は屈斜路湖も見たいと言ひ出した。「ただ、大きいだけの湖だよ」と僕は答えた。美幌峠からの眺めなら見たいが、車はどんどん下ると、東の方にハンドルを切つた。ナビを検索しながら進むと、和琴半島わごしとが出てきた。

和琴半島にはかつて来たことがある。三十三歳のとき、今から二十年余り前のことである。屈斜路原野のユースゲストハウスに泊まり、釧路川でカヌー体験したあと、サイクリングでここに立ち寄り、腰掛けてボート遊びする人を眺めながら、旅日記をつけていたのだった。

でも、来てみたら良かった。大きな湖であるだけに、懐ふとろの

深さが感じられる。半島の西側は砂浜が広がり、キャンプ場もつも設けられ、打ち寄せるさざ波に、夏の日射しが戯れている。子供たちが水辺に駆け寄る。カップルが並んで写真を撮る。女性的な優しさが広がっている。

半島と言っても、付け根の部分は数十メートルしかない。半島の中央にはかつての小火山、和琴山がそびえ、辺りは深い森となつている。湖岸に近い所には露天風呂もあつて、海水パンツをはいた若者が入っている。湯の温度は四十度以上あり、結構熱く感じられる。

半島を横切る形で東側に出ると、湖の様子は一変する。摩周湖ほどではないが、深く青い色をして、湖岸にしぶきを上げる湖水は、たふたふ音を立てている。深い音はそれだけ多くの水

をたたえ、水底みなぞこが知れぬことを意味している。おおらかでありながら、大きな力をはらんでいるのを見せつけられた。いかにも男性的な力を誇示している。和琴半島を境にして、これほど異なる様相を見せる屈斜路湖は、大きさに見合うだけの包容力もあるのだ。

釧路湿原は東から

あとは釧路湿原へ行くことになっていた。今回の旅の始めに、釧路市湿原展望台に寄ったわけだが、どうも本物を見た気がしない。これぞ釧路湿原といった光景を目にしなければ、再訪した気にはならないのだから。

今回は二回目、前回は二十年余り前になる。あの時と同じアングルから見たい。僕はコッタロ湿原展望台に行こうと言った。そこは湿原の外れで、コッタロ川の上流、塘路湖よりも北にある。舗装されていない駐車場に車を止め、見上げるほどの急階段を登っていく。しかし、そこで終わりではなかった。さらに山道をぐんぐん上っていく。息切れしそうになって、よう

やく木に囲まれた展望台まで登りきった。

ここからは湿原を斜めに見ることになるので、視界はそれほど開けていない。ただし、コッタロ川の形作る、入り組んだ川の水底と、鮮やかな草原のコントラストがすぐ真下に見えるのだ。カメラで接写するように、湿原の細かい点までくつきりと。

高台まで登りきるのは、老人には無理である。見下ろす湿原は鮮明な色で迫ってくる。葦原の間に白く見える点、目を凝らすと動いている。カメラで拡大してみると、丹頂鶴の形、頭の赤い色まで認められた。躍動する湿原の生命を感じさせる点で、やはりコッタロ湿原展望台からの眺めは男性的だ。

「時間的に厳しいんじゃないかな」と友人は答えたが、どうし

ても細岡展望台が見たいと、僕は言い張った。あれを見なければ、最高の眺めを目にしたことにはならないのだから。砂利道を走っていくと、小石がはじき飛ばされ、車にぶつぶつぶっかり、土煙で車の後ろは見えなくなる。

「今、釧路湿原の中を走っているんだよ」と友人は言った。釧網本線の踏切を渡ると、ようやく舗装された道路に出たが、メインテナンスがされていないのか、ひび割れがひどく激しく揺れる。

細岡展望台は細岡駅ではなく、釧路湿原駅に近い。駐車場に車を止めて、やはり坂道を上っていく。コッタロの方とは違って、だから坂の砂利道である。遠望するためには、途中の階段は登らずに、坂を上りきる必要がある。

標高は余り高くないが、視野が開けている。釧路湿原をスキヤンするように、パノラマの眺望が見渡せるのだ。草に覆われた湿原をゆるやかに流れる釧路川、光を反射する水面、川岸で風になびく木々の枝まで見える。視野の届く限り、ほとんど人工の物は目に入らない。なだらかに伸びる地平線、雲間から下りる光線まで、湿原のあらゆる姿を遠望させてくれる。

広大な湿原の中に、すべての生命が宿っている。縄文時代が終わって、海面が遠くに去ってから、命の受け渡しを繰り返しながらも、この光景は大きく変わることなく続いている。悠久ゆうきゆうの時間を経ても変わらない自然のおおらかさに、女性的な優しさを感じてしまうのだ。

今回の北海道旅行は、大学時代および三十代前半の、まだ青春の最後を惜しんでいた頃に訪れた地を再訪し、懐かしい大地とかつての自分に再会する旅だった。三十年、二十年の月日の隔たりは大きく、特に知床の変化には失望させられた。すっかり風景が変わってしまい、記憶と噛み合わないことが多かった。その反面、摩周湖や釧路湿原の風景では、長い時を経ても変わらぬ自然、年齢を重ねても生き続ける自分を確かめることもできた。「不易流行ふえきりゆうこう」という言葉があるけれども、変わらぬものと変わりゆくもの、その二つを結びつけるのは、時間とともに生きる自分自身だった。

あとは釧路市内に入り、レンタカーに給油して車を返した。

荷物を背負って空港に着いた頃には日が暮れていた。シマフクロウと丹頂鶴の剝製が飾られ、ライトアップされていた。チェックインしたものの、東京が雷雨のために離陸が遅れていた。午後九時十分前、羽田行きの最終便は動き出した。すぐに釧路市街が下に見え、北海道は遠ざかっていった。

工藤裕之の『追憶の鉄路』

子供の頃、僕も鉄道マニアだった。近隣の鉄道路線の駅名を覚えるのが趣味だった。坊さんがお経を暗誦あんしよするのと同じで、リズムカルに声を出すと覚えられるものだ。一種の記憶術だったのだろうか。また、父の部屋には昭和三十年代の鉄道路線図の本があったから、まだ行ったことがない地を、駅名を見ながら空想したものだ。

北海道を初めて旅したのは、一九八四年（昭和五九）のことだった。青函トンネルが出来る以前で、上野から急行八甲田に乗り、十一時間もかかって青森駅に到着した。すぐに青函連絡船に乗るために、棧橋へと向かった。八甲田丸の船体の大きさ

には驚いた。埠頭^{ふとう}まで線路が引かれていて、貨車は船内に呑み込まれていく。津軽海峡を渡る間は、日本海から流れ込む潮を眺めていたものだ。

函館に着くと、今はなき特急「おおとり」に乗り込んだ。函館発網走行き^{のうしゆ}の長距離列車である。その頃はまだ、函館が北海道の玄関口だったのだ。北海道に來たとまず実感したのは、砂原支線^{さわら}に入ってからだった。大沼駅から沼の東側に沿って原野を進むと、遠方に駒ヶ岳を望むパノラマが出現した。今では特急はすべて大沼公園経由になってしまい、旅行者が目にすることはあまりなくなった。

これが初めての北海道旅行の始まりだった。貧乏学生だった僕は、十日余りの旅で道内を回ったのだが、廃止された路線で唯一乗ったのが、網走から出ていた湧網線^{わうもう}だった。あと、二回目の旅行で、名寄駅に停車していた深名線のディーゼルカーを見たぐらいかな。本当は廃止される前に、国鉄分割民営化で消え去った多くの路線に乗ってみたかったが、金銭的にそんな余裕はなかった。

国鉄分割民営化は、赤字路線の廃止と、労働組合潰しが目的だったようだ。北海道の路線の三分の二が廃止された結果を見れば、過疎地域が大半の北海道を、JR北海道だけで維持するのは無理だったのだ。線路を補修する費用もままならず、脱線事故が続いたり、豪雨による橋脚や路肩^{ろかた}の流出で根室本線と日高本線の一部が、復旧を見込めぬまま廃止されることになった

のも、分割民営化が誤りだったことを示しているのではないか。海外では採算を無視しても、住民の足である地方路線が維持されたり、記念鉄道として廃止路線を復活させたりしている。日本でも廃止された美幸線の一部にトロッコを走らせるなどして、観光資源として活用していく動きがある。湧網線の廃線跡はサイクリングロードとなっていた。ただ目に映る景色は同じでも、線路をトコトコ走るディーゼルカーから得た印象とは異なる。それは何だろうか。

工藤裕之の『追憶の鉄路』を手に取って分かったのは、鉄道を維持する駅員や地域住民と、通りすがりの旅人との心の触れ合いがあったということだ。昭和時代の人情が、廃止された路線には残っていたのである。旅人を駅長室に招いたり、子供を車掌室に入れたりするなどは、現在のような杓子定規な社会では考えられない。相手を喜ばせてあげたい、ただそれだけの思いで、実害のないルール違反が行われていたわけだ。サービスマンしてもらった方も、それを吹聴ふいちやうしないという礼儀は知っていた。

赤字路線の切り捨てとともに、昭和時代に残っていた人間味のある曖昧さ、非効率性、いい加減さが葬ほうむり去られてしまった。線路に糞便をまき散らしたり、便所が卒倒するほど臭かったり、ホーム下が吸い殻のゴミ捨て場だったりしたが、僕は若かった頃、昭和時代の混沌こんとんとした日本の方が好きだ。今でも悔やまれるのは、一掃されてしまった赤字路線の多くに乗れなかったということ。そうした鉄道マニアにとつて、工藤裕之の『追

『憶の鉄路』は、かなわなかった北海道の赤字路線の旅を、空想のうちになえさせてくれる写真集である。

参考文献

工藤裕之『追憶の鉄路』（北海道新聞社）

あとがき

大学生だった二十代の初めから、天命を知るようになった最
近までの三十年間に、僕は四回北海道を訪れている。本州とは
異なる自然は、当時の若者には異境の地のように感じられた。
上野から青森まで、急行「八甲田」で十一時間もかかり、青函
連絡船で津軽海峡を渡ったことも、未知の世界への旅という思
いを強くした。成人してはじめてする長旅、それは見知らぬ世
界をさすらう心の旅でもあった。

第二回までの旅は、僕自身の青春の記録であり、感じやすか
った青くさい自分に、甘美な懐かしさまで覚えてしまう。三十
を過ぎた第三回の旅は、過ぎ去った青春に後ろ髪を引かれなが

らも、人生を直視せざるを得なくなった分岐点に立つ自分を、思い起こさせてくれる。そして、五十過ぎの第四回の旅は、諦観ていかんという言葉が悟りとあきらめを意味するように、感傷を排したありのままの自分と向き合う機会を与えてくれた。

僕という人間が成人したばかりの頃からの半生が、ここには記録されていることになる。北海道の先住民であるアイヌ人に敬意を示して、人生の変遷を刻んだ異境の地での紀行を、『アイヌモシリへの旅』と名づけることにした。「アイヌモシリ」とは、「人間の土地」という意味である。ちなみに、『星の王子さま』を書いたサン＝テグジュペリには、同名の作品がある。

今回、第五回目の旅を増補した。若い頃に訪ねた大地を再訪

し、かつての自分との接点を探る旅だった。四回目までの旅については、多少表記などを改めたほかは変えていない。巻末に工藤裕之の『追憶の鉄路』についての文章を添えた。かつての北海道には鉄道網が張り巡らされ、どれほど旅情あふれる大地であったか分かる写真集である。

以下に全五回の旅の行程を記すことにする。

第一回目（一九八四年）

八月三十日 上野駅から急行「八甲田」青森行に乗車。

八月三十一日 青函連絡船で函館に渡り、室蘭本線経由で札幌へ。

同地に宿泊。

九月一日 北海道大学を訪ね、付属の植物園などを見学。上川に出て、層雲峡に宿泊。

九月二日 黒岳登頂。夜、網走に宿泊。

九月三日 サロマ湖畔を散策。

九月四日 屈斜路湖、硫黄山（アトサヌプリ）、摩周湖を訪れ、その夜、釧路に宿泊。

九月五日 納沙布岬に行き、その夜、石勝線経由の夜行列車札幌行に乘車。

九月六日 白老のポロト・コタン、登別のクマ牧場を訪ね、苫小牧市内のウトナイ湖畔に宿泊。

九月七日 洞爺湖で足こぎボートに乘る。大沼公園に宿泊。

九月八日 大沼公園をサイクリング。函館山に登り、夜、函館港から青函連絡船に乘る。

九月九日 急行「八甲田」で上野着。

第二回目（一九九一年）

八月十八日 急行「八甲田」で上野を出発。

八月十九日 青森着。津軽海峡線で函館へ。札幌に宿泊。

八月二十日 網走経由で知床半島のウトロに宿泊。

八月二十日 知床五湖、知床大橋を訪れる。ウトロに宿泊。

八月二二日 旭川に出、宗谷本線に乘る。稚内で宿泊。

八月二三日 利尻島に渡る。島内をサイクリングする。鴛泊に宿泊。

八月二四日 礼文島に渡る。香深に宿泊。

八月二五日 「愛とロマンの八時間コース」を踏破。香深に宿泊。

八月二六日 稚内経由で塩狩温泉に宿泊。

八月二七日 小樽を散策。忍路環状列石を見る。札幌に宿泊。

八月二八日 函館山に登る。津軽海峡線で青森に出、急行「甲田」に乗る。

八月二九日 上野着。

第三回（一九九六年）

八月一日 羽田空港から女満別空港へ。知床半島ウトロに宿泊。
八月二日 カムイワツカの滝に登る。知床五湖、オシンコシンの滝を見る。ウトロに宿泊。

八月三日 知床岬まで航行。羅臼経由で中標津に宿泊。

八月四日 野付半島を巡る。中標津に宿泊。

八月五日 硫黄山（アトサヌプリ）、摩周湖を見る。弟子屈に宿泊。

八月六日 釧路川をカヌーで下る。屈斜路湖畔をサイクリング。弟子屈に宿泊。

八月七日 釧路湿原の塘路湖、コッタロ湿原、細岡展望台など

を巡る。釧路に宿泊。
八月八日 釧路市街を散策。釧路空港を発ち、羽田空港着。

第四回（二〇一四年）

九月三十日 羽田空港から新千歳空港へ。旭川に宿泊。
十月一日 朱鞠内湖、智恵文を経て、トロッコ王国美深で旧美幸線を走り、歌登に宿泊。
十月二日 音威子府を経てサロベツ原野を歩く。ノシヤップ岬の夕陽を見て、稚内に宿泊。
十月三日 大沼の野鳥観察館を訪れた後、宗谷岬、浜頓別のク

ツチャロ湖、ベニヤ原生花園を見る。旭川経由で札幌に出て宿泊。

十月四日 札幌大通公園を散策した後、支笏湖畔で過ごす。新千歳空港を発ち、羽田空港着。

第五回（二〇一七年）

八月十六日 羽田空港発、釧路空港着。釧路市湿原展望台に寄り、阿寒湖畔泊。

八月十七日 阿寒湖畔発、オンネトーに寄り、能取湖畔で昼食。サロマ湖のワッカ原生花園をサイクリング。網走湖畔泊。

八月十八日 小清水の原生花園、オシンコシンの滝、カムイワツカの滝、知床五湖を巡り、ウトロ泊。
八月十九日 硫黄山（アトサヌプリ）、摩周湖、屈斜路湖、釧路湿原のコッタロ湿原、細岡展望台を巡る。釧路空港を発ち、羽田空港着。

二〇一八年四月十八日

高野敦志